



現代スウェーデン語の不変化詞動詞と非語彙的抱合 — 語彙機能文法による分析 —

當野，能之

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2007-03-25

(Date of Publication)

2023-11-15

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4136

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004136>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



現代スウェーデン語の不変化詞動詞と非語彙的抱合
語彙機能文法による分析

當野 能之

論文の要旨

この博士論文では、現代スウェーデン語の不変化詞動詞 (**particle verb**) の分析を行った。不変化詞動詞とはゲルマン系の言語に見られ、動詞と（前置詞や副詞としての機能も持つ）不変化詞からなる一種の複雑述語である。また、句動詞 (**phrasal verb**)・分離動詞 (**trennbares Verb, separable verb**) などと呼ばれることもある。以下は、スウェーデン語・英語・ドイツ語の不変化詞動詞を含んだ例文である。

(1) a. John **ringde upp** tjejen.

J. rang up girl.the

‘John called up the girl.’

(スウェーデン語)

b. John **called up** the girl. / John **called** the girl **up**.

(英語)

c. John **rief** das Mädchen **an**.

J. rang the girl on

‘John called up the girl.’

c’. ... dass John das Mädchen **an-rief**.

that J. the girl on-rang

‘that John called up the girl.’

(ドイツ語)

不変化詞動詞は統語的に特殊な振舞いを見せることから、これまで理論言語学
の分野において長年、考察の対象となってきた。しかし、ゲルマン系の言語の中
でも英語・ドイツ語・オランダ語の不変化詞動詞に関する研究は数多くあるが、北
欧語の不変化詞動詞の研究はあまり多くない。本研究の目標はスウェーデン語の
不変化詞動詞の研究を通して、複雑述語の一般の問題を再考した。

以下では本論文の内容を各章毎に要約する。

第1章では本論文が扱う問題の設定とその一般言語学的意味を述べ、さらに、援
用する理論的枠組みの解説を行った。現代スウェーデン語の不変化詞動詞の研究は
「語とは何か」という一般言語学における基本的な問題と関わってくる。というの
も、不変化詞は統語的には二語であるが、意味的には一語あり、統語的なレベル
と意味的なレベルにおける語の間でミスマッチが起こっている。このような表示
のレベルの間のミスマッチを扱うため、本稿では語彙機能文法 (**Lexical-Functional**

Grammar) を援用した。語彙機能文法の特徴は、言語構造の複数の表示のレベルが同時に存在し、それぞれのレベルが派生によって結び付けられるのではないという点にある。不変化詞動詞において動詞と不変化詞がどのレベルで一語を成し、どのレベルで二語なのかという問題を扱う上で、最適の理論であるということができる。

第2章では現代スウェーデン語の不変化詞動詞の基本的特徴を概観した。現代スウェーデン語の不変化詞動詞は主に次のような特徴を持っている。

- (2) a. 不変化詞は動詞句内で動詞の直後、目的語名詞句の直前に位置する。
- b. 不変化詞は指定部も補部も取らない投射のない語 (non-projecting word) である。
- c. 動詞のアクセントが落ち、不変化詞にアクセントが置かれ、動詞と不変化詞でアクセントのユニットを成す。
- d. 動詞が過去分詞形の時に、不変化詞が動詞に前接する。

第3章では先行研究の問題点を概観した。先行研究はスウェーデン語の不変化詞動詞の統一性をどのレベルで捉えるかという点で異なっている。具体的には次のような説がある。

- (3) a. 不変化詞が独立した品詞 (syntactic category) を成すという説
- b. 不変化詞が特定の文法関係 (grammatical relation) を担うとする説
- c. 不変化詞を意味の観点から規定しようとする説
- d. 不変化詞を統語的な観点から規定しようとする説

第3章では以上のそれぞれの先行研究に問題があることを指摘した。

第4章以降がこの博士論文の分析の中心となる部分である。

第4章では、不変化詞動詞の意味構造を検討し、不変化詞が動詞に対して、非語彙的抱合 (Non-Lexical Incorporation) を起こし、意味的に一語を成していることを主張した。非語彙的抱合とは、意味抱合 (Semantic Incorporation) あるいは擬似抱合 (Pseudo Incorporation) と呼ばれているものと同じである。アメリカ先住民言語などに見られる通常の抱合においては、統語構造・意味構造の両方において抱合が起こるが、一方、非語彙的抱合とは、統語構造における抱合は起きないが、意味構造において抱合が起こるというものである。複合動詞と不変化詞動詞の関係

を綿密に調査することにより、スウェーデン語の不変化詞が動詞に対して非語彙的抱合を起こしているということを明らかにした。一般的に、語彙的・非語彙的を問わず、抱合する要素は X^0 レベルの語であることから、(2b) でみた不変化詞の特徴は、この非語彙的抱合の副産物であると考えられる。

第5章では不変化詞動詞の項構造を考察した。不変化詞動詞においては、外項は動詞の項が、内項は不変化詞の項が、常に不変化詞動詞全体の項として実現するということを主張した。不変化詞の項が常に内項として実現しているかどうかが大きな問題となるが、スウェーデン語の不変化詞動詞には、動詞の項が実現せず不変化詞動詞の項のみが文全体の項として実現する「擬似主語構文」が存在すること。また、不変化詞動詞を述語とする二重目的語構文では、二つの目的語が共に動詞の選択した項ではなく、不変化詞の意味的な項であると考えられることなどから、上記の一般化が正しいという結論に達した。

第6章では不変化詞動詞を含む文の文法関係と統語構造を考察した。まずは文法関係に関して分析した。従来、結果構文に意味的に類似した動詞不変化詞構文の文法関係のレベルにおいては複文 (bi-clausal) であると分析されているが、本稿では不変化詞動詞を含んだ文の文法関係は単文 (mono-clausal) であり、文法関係のレベルにおいては一語であるという主張を展開した。次に不変化詞動詞を含んだ文の統語構造、特に、その動詞句の構造を分析した。これまでの動詞・不変化詞・目的語名詞句を含む動詞句の統語構造に関してはこれまで、動詞と不変化詞が構成素を成す (1a) のような階層構造が仮定されてきたが、階層構造を仮定するような言語事実はなく、(1b) のような平らな動詞句であると主張する。

(4) a. [[動詞 + 不変化詞] 目的語名詞句]

b. [動詞 + 不変化詞 + 目的語名詞句]

第7章では本研究のまとめを示した上で、今後解決されるべきいくつかの問題点を示した。

目次

第 1 章	はじめに	5
1.1	本稿の目標	5
1.2	語の多面性	7
1.3	理論的背景	8
1.4	スウェーデン語の句構造	13
1.5	構成	16
第 2 章	不変化詞動詞の特徴	19
2.1	はじめに	19
2.2	統語的特徴	20
2.3	音韻的特徴	26
2.4	形態論的特徴	26
2.5	不変化詞のカテゴリー	27
第 3 章	先行研究とその問題点	35
3.1	はじめに	35
3.2	不変化詞の統語範疇	35
3.3	不変化詞の文法機能	36
3.4	不変化詞の意味機能	38
3.5	不変化詞の統語的特徴	40
第 4 章	意味構造における非語彙的抱合	45
4.1	はじめに	45

4.2	抱合	45
4.3	非語彙的抱合	47
4.4	不変化詞動詞における非語彙的抱合	49
4.5	非語彙的抱合の説明の検討	61
第 5 章	項構造	65
5.1	はじめに	65
5.2	不変化詞の意味構造	65
5.3	不変化詞動詞と項構造	67
第 6 章	文法関係と句構造	85
6.1	文法関係	85
6.2	句構造	89
第 7 章	まとめ	93
References		97

第1章 はじめに

1.1 本稿の目標

この博士論文では、現代スウェーデン語の不変化詞動詞 (particle verb) を分析する。不変化詞動詞とはゲルマン系の言語に見られる一種の複雑述語であり、句動詞 (phrasal verb)、分離動詞 (trennenbares Verb, separable verb) などと呼ばれることもあるが、句動詞という用語は主に英語の文献で用いられることが多く、また、分離動詞という術語はもっぱらドイツ語の文法で使われているので、本稿では、より中立的な不変化詞動詞という用語を使うことにする^{*1}。

典型的な不変化詞動詞は動詞と不変化詞（多くの場合は前置詞や副詞としての用法も持つ）から成る。(1)–(3) は、スウェーデン語、英語そしてドイツ語の不変化詞動詞を含んだ例である^{*2}。

- (1) John **ringde** **upp** tjejen.
 J. ring.PAST up girl.DEF
 ‘John called up the girl.’ (スウェーデン語)
- (2) a. John **called up** the girl.
 b. John **called** the girl **up**. (英語)
- (3) a. John **rief** das Mädchen **an**.
 J. ring.PAST the girl on
 ‘John called up the girl.’

^{*1} 不変化詞という用語は、前置詞や接続詞などの屈折変化を起こさない品詞全般を指すのに用いられる場合もある。

^{*2} 本稿では、例文中の動詞と不変化詞は常にボールド体で示すこととする。

b. ... dass John das Mädchen **an-rief**.
 that J. the girl on-ring.PAST

‘that John called up the girl.’

(ドイツ語)

不変化詞動詞あるいは不変化詞の研究には長い歴史があり，文献の数も膨大であるが，その研究は大まかに言って二つの系統に分類することができるものと思われる．

一つは，不変化詞の多義性の問題を扱った研究である．不変化詞は空間関係を表す前置詞や副詞としての機能を持つものがほとんどで，一つの不変化詞が複数の意味を持つ場合が多い．近年は認知言語学 (Cognitive linguistics) の発展に伴い，プロトタイプ (Prototype) やイメージスキーマ (Image schema) など，認知言語学におけるキーとなる概念により，不変化詞の多義の体系が明らかになってきている．英語の不変化詞の多義性を扱った初期の研究としては Lindner (1981) が，スウェーデン語の不変化詞の多義性を扱った研究としては，Norén (1996)，Strzelecka (2003) などがある．

もう一方の研究の流れに，不変化詞動詞の「語」としての資格，つまり動詞と不変化詞が語を成すのか否かという問題を扱ったものがある．まず，不変化詞動詞が形態的に一つの単語であるか否かという問題がある．ドイツ語で分離動詞と呼ばれていることから分かるように，ドイツ語の不変化詞動詞は (3a) のように動詞と不変化詞が離れて現れることもあれば，(3b) のように動詞と不変化詞が一語となって現れることもある．したがって，もともと形態的に一語であるのかどうか．また，一語であるとするとき，どのような派生を経て，(3a) のような表層の統語構造に至るのかといったことが問題となる．また，不変化詞動詞は「意味的に一語である」と言われることがある．(1)–(3) の不変化詞動詞はそれぞれ「電話をかける」あるいは「電話に呼び出す」という意味であるが，動詞と不変化詞全体でそれらの概念を表している．つまり，(3b) 以外には，形態的に語を成していないが，意味的には一つの概念を成しているということができる．このように，不変化詞動詞は意味的に一語として認められても，形態的には二語であることがあり，それぞれのレベルにおける語としての資格に関して不一致 (mismatch) が見らる．不変化詞動詞は，この不一致をどのように扱うかをめぐって，主に生成文法を中心とする理論言語学の研究の対象と成ってきた．このような問題意識の基に近年書かれたモノグラフだけでも Dehé (2002)，

Dikken (1995), Zeller (2001b), Lüdeling (2001), Toivonen (2003), Stiebels (1996) などがある。また, Dehé, Silke, McIntyre, and Jackendoff (2002) の論文集も不変化詞の語としての資格を扱った論文が多く収められている^{*3}。

本稿では後者の問題, つまり不変化詞動詞の「語」としての資格に関する問題 — 不変化詞動詞がどのような点で一語であり, どのような点でそうではないのか — を, 現代スウェーデン語の不変化詞動詞を対象として, 分析していく。

1.2 語の多面性

これまで, 「語」としての資格と言ってきたが, 一つの単語であることを Matsumoto (1996), 松本 (1996) に習い, 語彙性 (wordhood) と呼ぶことにする。語彙性をめぐってはこれまで様々な形で議論が行われてきた。最もよく知られているのは形態的語彙性 (Morphological Wordhood) であろう。これは形態的緊密性 (lexical integrity) (Bresnan & Mchombo 1995) などとして知られているものである。形態的語彙性を持った語とは, 統語構造における最小の単位としての語であり, 形態論的に緊密なまとまりを持ったものである。したがって, その一部に統語規則を適用し, 分断したり, 一部を省略したり, 等位接続したりすることはできないなどの制約が存在する。

Matsumoto (1996), 松本 (1996) によると, 語彙性は形態的語彙性の他にも, 別の二つの側面から定義することができるという。一つは文法的語彙性 (Grammatical Wordhood) である。例えば, 動詞に関して言えば, 「主語, 目的語, 斜格語など, 一組の文法機能を支配する単位」(松本 1996: 39) を一語の動詞であると定義することが可能であるという^{*4}。語彙性に関するもう一つの側面は意味的語彙性 (Semantic Wordhood) であり, 意味的に一語をなす語は「一つ概念」を表すというものである。

これ以外にも, 窪園 (1995) に見られるように, 語を音韻的観点から定義することも可能であるが (音韻的語彙性 (Phonological Wordhood)), 本稿では不変化詞動詞の形態的・

^{*3} これ以外にも, 英語の不変化詞動詞をめぐっては, (2a)(2b) に見られる不変化詞移動 (particle shift, particle movement) と呼ばれる構文交替が問題となってきたが, 本稿ではこの問題を取り上げない。

^{*4} ここで言う文法機能とは Bresnan (1982b) で定義されているものである。

文法的・意味的語彙性を中心に考察していく。

1.3 理論的背景

形態的・文法的そして意味的語彙性を捉えるため、本稿では語彙機能文法 (Lexical-Functional Grammar, 以後 LFG) (Bresnan 1982a, 2001, Dalrymple 2001, Dalrymple, Kaplan, Maxwell, & Zaenen 1995, Kaplan & Bresnan 1982) を理論的装置として採用する。LFG は生成文法の一つであるが、統率・束縛理論 (GB 理論) などと異なり、様々な表示のレベルが変形や移動などにより派生されることはない。GB 理論では、D 構造 (D-structure), S 構造 (S-structure), 音声形式 (PF), 論理形式 (LF) といった表示レベルが仮定され、D 構造から始まり、移動操作を経て S 構造に達し、そこから PF と LF へと分かれていくというモデルが取られている。一方、LFG では複数の言語表示レベルが同時並行して存在し、それらの言語表示レベル間は、関数により対応付けられる。

LFG で仮定されている言語表示は研究者により異なるが、構成素構造 (constituent structure, c-structure), 機能構造 (functional-structure, f-structure) そして項構造 (argument structure) の三つを仮定するケースが多い。さらに、(語彙) 意味構造 ((lexical-) semantic structure) や情報構造 (information structure) を設定する場合もある。本稿では、構成素構造、機能構造、項構造そして意味構造の 4 つの構造を仮定することにする。以下では、それぞれの構造を簡単に解説する。

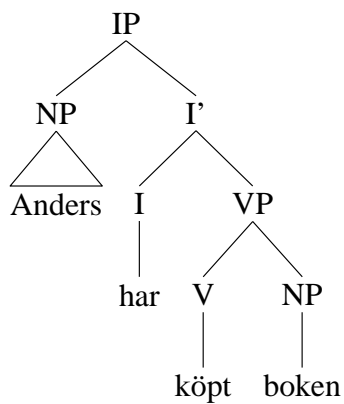
1.3.1 構成素構造と機能構造

LFG では主語や目的語といった文法関係は構造によって規定されるものではなく、無定義要素 (primitive) であるとしている。したがって、句構造つまり構成素構造を表すレベルとは別に、文法関係などを表示する機能構造が仮定されている。異なった言語の間で同じ意味の文の構成素構造、つまり表層の語順などは大きく異なりうる。一方、機能構造は非常に類似していると考えられている。次の簡単な文を例に、具体的な構成素構造と機能構造を見てみよう。

- (4) Anders har köpt boken.
 A. have.PRES buy.PERFP book.DEF
 ‘Anders has bought the book.’

(4) の構成素構造は下の (5) である。構成素構造は構成素同士の支配関係や先行関係を表す。

- (5) 構成素構造



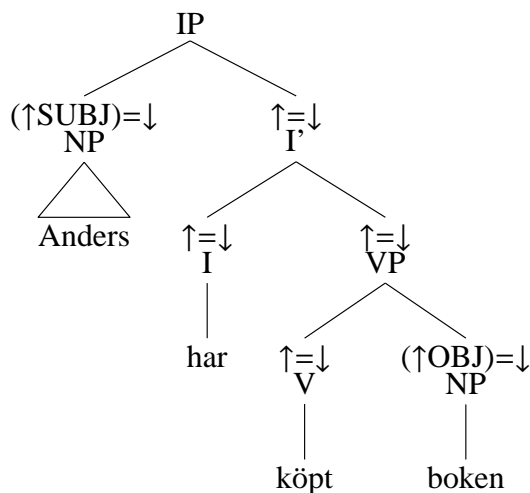
一方，(4) の機能構造は (6) の通りである。機能構造は素性とその値のマトリックスで，(6) では，左側にあるものが素性の名前で，その右側にあるものは素性の値である。素性の値は SUBJ や OBJ の値のように機能構造が埋め込まれていてもよい。機能構造には，主語・目的語と言った文法関係以外に，性・数・定性といった屈折に関する情報，テンス・アスペクトに関する情報などが含まれる。

(6) 機能構造

PRED	‘BUY <(SUBJ) (OBJ)>’
TENS	PAST
PERF	+
SUBJ	[PRED ‘ANDERS’]
	[PRED ‘BOOK’]
OBJ	DEF +
	NUM SG
	GEN Non-Neuter

構成素構造と機能構造の対応関係は構成素構造と機能構造との間の関数として与えられる。構成素構造の各節点 (node) には、次の (7) にあるように機能的注釈 (functional annotation) と呼ばれるものが付される。上向きの矢印は母親節点 (mother node) の機能構造を表し、下向きの矢印はその節点自身の機能構造を指している。例えば、NP である Anders に付されている $(\uparrow\text{SUBJ})=\downarrow$ は、文 (IP) の機能構造の主語の素性の値が NP 自身の機能構造に等しいことを表している。また、 $\uparrow=\downarrow$ は自身の機能構造がその母親節点の機能構造と等しいことを示している。

(7) 機能的注釈付き構成素構造



1.3.2 項構造と意味構造

次に本稿で仮定する項構造と意味構造を見てみよう。構成素構造と機能構造に関しては、(5)-(7) で見た構造が一般に認められているが、項構造と意味構造に関しては、LFG の研究者の間で一致した見解がない。本稿では、(動詞の) 項構造に関しては、主題役割 (thematic role) の情報を含んだ以下のような構造を仮定する (Bresnan & Moshi 1990)。

(8) köpa 'buy' <Agent Theme>

項構造と機能構造の関係は、LFG において集中的に研究されてきたテーマの一つである。特に、項の主題役割と文法関係がいかに結び付けられるのかという点が問題となってきた。主題役割と文法関係の対応関係に関して、LFG で発展したものに Lexical Mapping Theory (LMT) がある。詳しくは、Bresnan and Kanerva (1989), Bresnan and Moshi (1990) 等を参照のこと。

次に意味構造であるが、本稿では Jackendoff (1983, 1990), Pinker (1989) などが提案する概念構造 (Conceptual Structure) を採用する。これは、いわゆる語彙分解 (lexical decomposition) あるいは述語分解 (predicate decomposition) の結果で、動詞の中核的な意味を Event, State といった概念範疇と GO や TO といった基本関数で表そうとするものである。概念構造を用いた意味の記述にも様々な立場があるが、本稿で採用する意味記述に関して注意すべき点を二つ挙げる。

まずは、どのような情報を意味構造の中に書き込むかという問題である。一つは、Levin and Rappaport Hovav (1996) や 影山 (1996) に代表されるように、文の中核的な意味、特に動詞のアスペクトの情報に基づいた情報のみを意味の表記に持ち込もうという立場がある。一方で、Jackendoff (1990) や Matsumoto (1996) のように文の意味に関連する情報をできるだけ意味構造に書き込もうとする立場もある。本稿は後者の立場に立ち、文の中核的な意味以外の情報もできるだけ意味構造に書き込むことにする。ただし、文の意味に関するありとあらゆる情報を意味構造に記すというのは現実には困難であり、ここでは、Jackendoff (1983, 1990), Pinker (1989), Matsumoto (1996) を参考に意味構造を記述するこ

とにする。

もう一つ概念構造の記述に関して注意すべき点としては、因果関係あるいは使役関係をどのように表すかという問題がある。因果関係あるいは使役関係には、原因となる事象と結果となる事象の二つの事象が関与する^{*5}。この二つの事象の関係を表すため、原因事象と結果事象を項として取る意味述語である CAUSE あるいはそれに類する関数が伝統的に用いられてきた。原因事象を E1、結果事象を E2 とすると次のように記述することができる。

(9) [CAUSE (E1, E2)]

この立場では、原因事象と結果事象は両方とも CAUSE の項であるという点で対等である。

一方で、結果事象を原因事象に従属したものとして扱う Pinker (1989), Matsumoto (1996) のような立場もある。ここでは結果事象を導く従属する関数として RESULT という関数を仮定すると次のように表すことができる。

(10)
$$\left[\begin{array}{l} E1 \\ [RESULT (E2)] \end{array} \right]$$

どちらの立場が正しいかを議論するのは本稿の範囲を超えているので行うことができないが、本稿では、結果事象が原因事象に従属するという後者の立場を取り、意味記述を行うことにする。

さて、以上をふまえた上で、(4) の意味をどのように記述することができるか考える。(4) の動詞の概念構造を表した (11) を見てみよう。

(11)
$$\left[\begin{array}{l} ACT (x, y) \\ [RESULT [EVENT GO (y, [PATH FROM (z), TO (x)])]] \\ [EXCH [EVENT GO (MONEY, [PATH FROM (x), TO (z)])]] \end{array} \right]$$

^{*5} これ以外にも、個体が出来事を引き起こすという Jackendoff (1983) のような考え方もあるが、本稿ではその点は問題としない

「買う」という出来事には、動作主 (x) が商品 (y) になんらかの働きかけをするという主事象があり、上記の意味構造の一行目に記されている。さらに、その商品 (y) が売り手 (y) から買い手である動作主 (x) に移動するという結果事象がある。これは従属する事象として2行目に記されている通りである。また、商品の移動と共に、代金が買い手 (z) から売り手 (y) に移動する。この部分が意味構造の最後に記されている部分で、EXCH という従属事象を導く関数で表されている。

また、(時制などの情報を除いた) 文の意味構造は (12) のように表示することができる。

$$(12) \left[\begin{array}{l} \text{ACT (ANDERS, BOOK)} \\ \text{[RESULT [EVENT GO (BOOK, [PATHFROM (z), TO (ANDERS)])]} \\ \text{[EXCH [EVENT GO (MONEY, [PATHFROM (ANDERS), TO (z)])]} \end{array} \right]$$

本稿で仮定する意味構造の詳細については第4章と第5章で述べる。

1.4 スウェーデン語の句構造

スウェーデン語の不変化詞動詞を見るには、どうしてもスウェーデン語の句構造に関する理解が必要となる。そこで、この節ではスウェーデン語の句構造を動詞の位置を中心に簡単に解説することにする。

スウェーデン語は SVO 言語である。また、ドイツ語などと同様に、動詞第二位 (V2) の現象を示す。V2 とは平叙文の主節で定形動詞 (finite verb) が二番目の要素として現れることを言う^{*6}。例えば、次の文では、定形動詞 *sparkade* ‘kicked’ は第二番目の位置に現れ、一番目の位置には主語名詞句 ((13a) の *Peter*)、目的語名詞句 ((13b) の *bollen* ‘the boll’) や副詞句・前置詞句 ((13c) の *i rummet* ‘in the room’) が現れている。

^{*6} 定形動詞 (finite verb) とは、数・人称・時制などの定まった動詞の形態を指し、現在形・過去形などがそれに当たる。一方、非定形動詞 (non-finite verb) とは、それらが限定されていない動詞の形態で、不定形・分詞形などが相当する。

- (13) a. Peter **sparkade** bollen i rummet.
 P. kick.PAST ball.DEF in room.DEF
 ‘Peter kicked the ball in the room.’
- b. Bollen **sparkade** Peter i rummet.
 ball.DEF kick.PAST P. in room.DEF
- c. I rummet **sparkade** Peter bollen.
 in room.DEF kick.PAST P. ball.DEF

一方、非定形動詞 (non-finite verb) は句構造上、定形動詞よりも低い位置に現れる。これは否定辞 *inte* ‘not’ との相対的な位置関係から確認することができる。下記の例からも分かるように、定形動詞である (14a) の *sparkade* は否定辞より左に、非定形動詞である (14b) の *sparkat* は右に現れる。

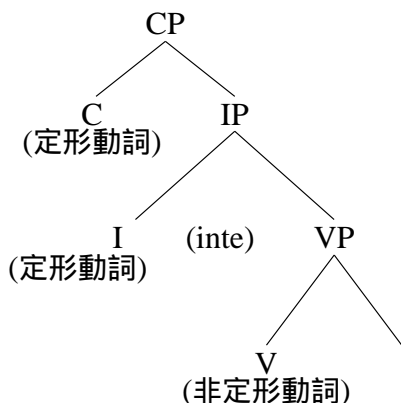
- (14) a. Peter **sparkade** inte bollen.
 P. kick.PAST not ball.DEF
 ‘Peter did not kick the ball.’
- b. Peter har inte **sparkat** bollen.
 P. have.PRES not kick.PERFP ball.DEF
 ‘Peter has not kicked the ball.’

否定辞 *inte* は動詞句 (VP) と時制句 (IP) の間に位置するものと考えられているので^{*7}、非定形動詞は動詞句内に、定形動詞は動詞句より高い位置に現れるということになる。「補文句 (CP) – 時制句 (IP) – 動詞句 (VP)」という標準的な句構造を仮定した場合、定形動詞は補文句の主要部 C か、時制句の主要部 I に現れることになるが、定形動詞の句構造上の位置に関しては二つの説がある。一つは、主節において定形動詞が全て C に現れるとする説である。例えば、Holmberg and Platzack (1995) などがそのような立場に立っている。もう一つは、定形動詞でも C に現れる場合と I に現れる場合があるとする説である。具体的には、(13a) のような正置語順の場合、定形の動詞は I に位置し、一方、(13b) や (13c) のような倒置語順の場合には C にあるとする説である (Sells 2001)。本稿では、主に動詞句内の構造を見ていくことになるので、どちらの説を採ったとしても問題はない

^{*7} 否定辞の位置に関しては、Holmberg and Platzack (1995), Sells (2000) などを参照のこと。

が、便宜上後者の説を採用することとする。以上をまとめると動詞の現れる位置は次のようにまとめることができる。

(15) 主節における動詞の位置

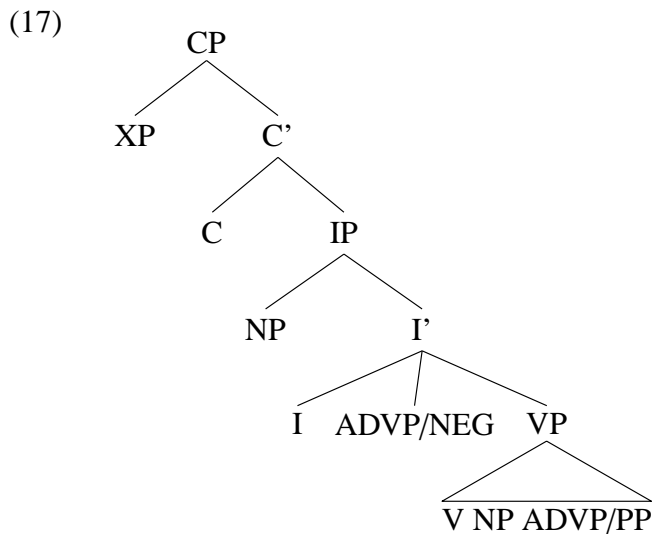


一方従属節では、動詞は定形動詞か非定形動詞かに関わらず、否定辞より右に現れる。したがって、動詞は常に動詞句の主要部に位置していることになる。

- (16) … att Peter (inte) **sparkade** (*inte) bollen.
 that P. not kick.PAST not ball.DEF
 ‘… that Peter did not kick the ball.’

動詞の位置以外の文の構造も少し考察しよう。(13b) や (13c) から分かるように、トピックとなる要素は文頭に現れる。これらは一般に CP の指定部にあるとされている。また、(13a) – (13c) それぞれの主語名詞句は、IP の指定部にあると考えられる*⁸。副詞(句)や前置詞句の現れる位置に関しては様々な議論があるが、文副詞類は否定辞と同じく VP と IP の間に現れ、動詞句に関わる副詞句・前置詞句は動詞句内に現れるものと考えられている。したがって、スウェーデン語の文の構造はおおむね以下のような構造をしているものと考えられる。

*⁸ ただし、定形動詞が全て C にあるとする立場では、(13a) の主語名詞句は CP の指定部にあるということになる。



1.5 構成

本稿の第2章以降の構成は次の通りである。

第2章では現代スウェーデン語の不変化詞動詞の基本的特徴を概観する。特に、不変化詞と前置詞・副詞との違いを明らかにし、この論文で扱う対象を定める。第3章では先行研究を概観する。先行研究はスウェーデン語の不変化詞動詞の統一性をどのレベル（文法範疇・文法関係・意味構造・統語構造）で捉えるかという点で異なっている。第3章ではどの説にも問題点があることを指摘する。

第4章と第5章がこの博士論文の分析の中心となる部分である。

第4章では、不変化詞動詞の意味構造を検討し、不変化詞が動詞に対して、非語彙的抱合 (Non-Lexical Incorporation) を起こし、意味的に一語を成していることを主張する。特に、複合動詞と不変化詞動詞の関係を綿密に調査することにより、スウェーデン語の不変化詞が動詞に対して非語彙的抱合を起こしているということを明らかにする。また、不変化詞動詞に見られる統語的特徴の一部が、この非語彙的抱合の産物であるということも主張する。

第5章では不変化詞動詞の項構造を考察する。不変化詞動詞では常に、外項は動詞の項が、内項は不変化詞の意味的な項が、不変化詞動詞全体の項として実現するということを論証する。最後に項構造がレキシコンで決定するとする伝統的な語彙主義に基づき、不変

化詞動詞が項構造においても 1 語であることを主張する。

第 6 章では不変化詞動詞を含む文の文法関係と統語構造を考察する。本稿では、不変化詞動詞を含んだ文は機能的に単文 (mono-clausal) であり、文法関係のレベルにおいては一語であるという主張を展開する。また、不変化詞動詞を含んだ文の統語構造、特に、その動詞句の構造を分析する。動詞・不変化詞・目的語名詞句を含む動詞句の統語構造はこれまで主張されてきたような階層構造ではなく、平らな構造であると主張する。

第 7 章では本研究のまとめを示した上で、今後解決されるべきいくつかの問題点を示す。

第2章 不変化詞動詞の特徴

2.1 はじめに

この章ではスウェーデン語の不変化詞動詞の特徴を見ていく。多くの不変化詞は副詞や前置詞としての働きを持つが、不変化詞動詞が動詞と前置詞句、あるいは動詞と副詞の組み合わせとどのように違うのかに注意しながら特徴を観察していく*1。

不変化詞動詞という用語が指し示す範囲は、研究対象とする言語によって、あるいは研究者によって異なることが多い。Lüdeling (2001) によるとこれには大きく分けて三つの立場があると言う。一つ目は不変化詞が自動的前置詞 (intransitive preposition) つまり、目的語を取らない前置詞であるとする説である*2。これは英語の不変化詞動詞の研究で多くみられる立場である (Jespersen 1924, Emonds 1972, Jackendoff 1973)。スウェーデン語の研究では、Platzack (1998) などがこの立場を取っている。2つ目の立場はこれとは対照的なもので、前置詞だけでなく、全ての語彙範疇が不変化詞として振舞うと主張するものである。スウェーデン語を例に見てみよう。

- (18) a. Peter **körde** **bil**. (名詞)
 P. drive.PAST car
 ‘Peter drove a car.’
- b. Peter **lät** **bygga** ett hus. (動詞)
 P. let.PAST build.INF a house
 ‘Peter had a house built.’
- c. Peter **sopade** **rent** golvet. (形容詞)
 P. sweep.PAST clean floor.DEF
 ‘Peter swept the floor clean.’

*1 不変化詞と副詞や前置詞が同じ文法範疇に属するのかどうかという問題があるが、この章ではその点には触れず、4章で考察することにする。

*2 この立場では副詞も自動的前置詞ということになる。

(18a)の冠詞の付いていない裸名詞 *bil* ‘car’, (18b)の不定詞 *bygga* ‘build’ そして (18c)の形容詞 *rent* ‘clean’ が不変化詞として機能し、それぞれの直前にある動詞と共に不変化詞動詞を形成するというものである。ドイツ語の不変化詞動詞の研究では、Stiebels and Wunderlich (1994) がこの立場を取っている。また、Lüdeling (2001) によれば、伝統的なドイツ語の文法書や辞書もこの立場に立って書かれているという。Anward and Linell (1976), Toivonen (2002, 2003) などのスウェーデン語の研究でも、あらゆる語彙範疇が不変化詞としての資格を持つことが主張されている。最後の立場は語彙範疇の中でも前置詞と形容詞のみが不変化詞として振舞うというもので、Lüdeling (2001) 自身はこの立場に立っている。この立場の背景には、不変化詞動詞は一種の原因と結果の関係を表しており、不変化詞はその結果の部分を担当して、それを表すことができる文法範疇が前置詞と形容詞であるという考えがある。Teleman, Hellberg, and Andersson (1999b) などの多くのスウェーデン語の研究は、暗黙のうちにこの立場で不変化詞に関する記述を行っている。

この章では、まず前置詞あるいは副詞としての機能を持つ不変化詞の特徴を見た上で、それ以外の語彙範疇で同じ特徴を示すものがあるか検証する。結論として、名詞・動詞・形容詞のうち、名詞と形容詞は不変化詞として認めるが、動詞は不変化詞としては認められないということが明らかになる。

2.2 統語的特徴

まず、不変化詞動詞の統語的特徴から見ていこう。特に不変化詞は、その句構造上の位置と不変化詞自体の投射という点で、前置詞や副詞と異なった振舞いを見せる。

2.2.1 不変化詞の句構造上の位置

まずは不変化詞動詞の現れる句構造上の位置から見てみよう。前章の (15) でも見たように、主節において非定形動詞は動詞句の主要部に、定形動詞は CP あるいは IP の主要部に現れる。一方、不変化詞は常に動詞句内に現れる。これは前章でも見た否定辞 *inte* との相対的な位置関係から確認することができる。

- (19) a. Peter **sparkade** inte **upp** bollen.
 P. kick.PAST not up ball.DEF
 ‘Peter did not kicked up the ball.’
- b.*Peter **sparkade** **upp** inte bollen.
 P. kick.PAST up not ball.DEF
- c.*Peter **sparkade** **upp** bollen. inte
 P. kick.PAST up ball.DEF not

前章でも述べたように、否定辞 *inte* は IP と VP の間に位置するものと仮定されている。上記の例からも分かるように、不変化詞は常に否定辞よりも右側に位置しているので、動詞句内にあることになる。

動詞が動詞句内にある場合には不変化詞は動詞の直後に現れる。また、目的語名詞句がある場合、不変化詞はそれよりも左側に現れ (= (20a))、右側に現れることはない (= (20b))。

- (20) a. Peter har [VP **sparkat** **upp** bollen]
 P. have.PRES kick.PERFP up ball.DEF
 ‘Peter has kicked up the ball.’
- b.*Peter har [VP **sparkat** bollen **upp**]
 P. have.PRES kick.PERFP ball.DEF up

また、(21a)、(21b) から分かるように、目的語名詞句がアクセントのない弱い代名詞であったとしても、語順は変わらず、英語の不変化詞移動のような現象はスウェーデン語では見られない。

- (21) a. Peter har [VP **sparkat** **upp** den]
 P. have.PRES kick.PERFP up it
 ‘Peter has kicked it up.’
- b.*Peter har [VP **sparkat** den **upp**]
 P. have.PRES kick.PERFP it up

また、ドイツ語のように主節と従属節で動詞と不変化詞の相対的な位置関係が変わることもない (= (22))。

- (22) att Peter har **sparkat upp** {bollen / den}.
 that P. have.PRES kick.PERFP up ball.DEF / it
 ‘that Peter has kicked {the ball/it} away.’

以上からも分かるように、スウェーデン語の不変化詞は常に目的語名詞句よりも前に現れるという特徴を持つ。この特徴は一見すると、不変化詞動詞が他動詞の場合にのみ有効であり、自動詞の場合には当該の語が不変化詞か否かを見分けることができないように思われるかもしれない。しかし、実は不変化詞動詞が自動詞の場合でもこの特徴は有効なのである。この点を簡単に見てみよう。

スウェーデン語には提示文 (presentational sentence) と呼ばれる一種の存在文がある (Platzack 1983, Vikner 1995, Börjars & Vincent 2004)。次の文を見てみよう。

- (23) a. En räv **sprang** i trädgården.
 a fox run.PAST in garden.DEF
 ‘A fox sprang in the garden.’
 b. Det **sprang** en räv i trädgården.
 it run.PAST a fox in garden.DEF

(23a) は通常の自動詞文で、(23b) が提示文である。提示文においては文頭に虚辞 *det* ‘it’ が置かれ、論理的主語である *en räv* ‘a fox’ は動詞の直後、つまり通常目的語名詞句が現れる位置に置かれる。提示文に現れる動詞は主に自動詞（非対格自動詞・非能格自動詞を問わない）や他動詞の受動形である。動詞の直後に現れる論理的主語の文法関係をめぐっては、目的語であるとする説 (Platzack 1983, Vikner 1995) と主語であるとする説 (Börjars & Vincent 2004) があるが、この点は本稿の議論には直接影響しないので問題としない。重要なのは、論理的主語が通常目的語名詞句が現れる位置に立つという点である。

さて、不変化詞を含む自動詞も提示文に現れうる。注目したいのは不変化詞が現れる位置である。

- (24) a. En **råtta** sprang **in**.
 a rat ran in
 ‘A rat ran in.’

b. Det **sprang in** en råtta.

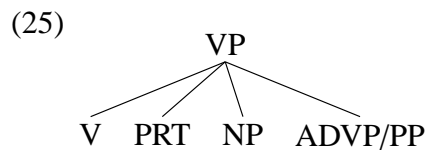
it ran in a rat

c.*Det **sprang** en råtta **in**.

it ran a rat in

(24a) は不変化詞を含んだ通常の自動詞文である。一方，(24b) はその同じ不変化詞動詞を含んだ提示文である。注目したいのは，不変化詞 *in* ‘in’ が動詞の直後，そして目的語位置にある論理的主語より前にあるという点である。(24c) から分かるように，論理的主語の後ろに不変化詞を置くことはできない。つまり，不変化詞動詞を含んだ自動詞文においても，不変化詞は動詞の直後，目的語位置の直前にあるということがわかる。

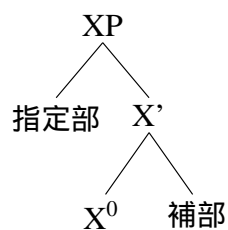
以上，他動詞文でも自動詞文でも，不変化詞は句構造上の同じ位置にあることが分かった。平らな動詞句を仮定した場合，不変化詞を含む動詞句の構造は以下ようになる。



2.2.2 不変化詞の投射

不変化詞の二つ目の特徴はその投射 (projection) である。Toivonen (2002, 2003) はスウェーデン語の不変化詞が投射のない語 (non-projecting word) であると主張している。一般に，語は投射する。つまり，(26a) にあるように指定部 (specifier) と補部 (complement) を持つ。したがって，投射のない語とは (26b) にあるような補部や指定部を取らない語ということになる。

(26) a. 投射のある語



b. 投射のない語

$$\begin{array}{c} | \\ X^0 \end{array}$$

不変化詞が投射のない語，つまり指定部も補部も取らない語であるという証拠を見ていこう。

まずは，補部の有無から．すでに，英語の不変化詞の研究で言われていることだが，不変化詞を自動的前置詞 (intransitive preposition) であるとする見方がある (Jespersen 1924, Emonds 1972, Jackendoff 1973)．これは，動詞に目的語を取る他動詞と取らない自動詞があるように，前置詞にも目的語を取る他動的前置詞 (transitive preposition) と自動的前置詞 (intransitive preposition) があるという考え方である．スウェーデン語には *i* ‘in’ という他動的前置詞と *in* ‘in’ という自動的前置詞つまり不変化詞のペアがある．以下はそれぞれを含んだ例である．

- (27) a. Peter **sparkade** bollen **i** lådan. (他動的前置詞)
 P. kick.PAST ball.DEF in box.DEF
 ‘Peter kicked the ball into the box.’
- b. Peter **sparkade in** bollen. (自動的前置詞)
 P. kick.PAST in ball.DEF
 ‘Peter kicked in the ball.’

次の (28a) から分かるように，他動的前置詞である *i* は直後の名詞句と構成素を成し，前置することができる．一方，自動的前置詞である *in* は直後の名詞句と共に前置できないことから，構成素を成していないということが分かる (= (28b))．

- (28) a. **I** lådan **sparkade** Peter bollen. (他動的前置詞)
 in box.DEF kick.PAST P. ball.DEF
 ‘Peter kicked the ball into the box.’
- b. ***In** bollen Peter **sparkade**. (自動的前置詞)
 in ball.DEF P. kick.PAST
 ‘Peter kicked in the ball.’

以上から、不変化詞は自動的前置詞つまり補部を取らないということが分かる^{*3}。しかし、自動詞は補部を取らないが投射はするものと一般に仮定されている。不変化詞に関しても、補部を取らないということが、投射しないという証拠にはならない。ところが、Toivonen (2002, 2003) によると、スウェーデン語の不変化詞は補部だけでなく、指定部も取らないと言う。次に指定部の有無に関する Toivonen (2002, 2003) のこの考察を見てみよう。

前置詞や副詞はその指定部に程度表現 (degree expression) を取ることができる。ところが、(29b) から分かるように、不変化詞 *bort* は修飾語句 *längre* を取ることができない。通常の副詞としての *bort* は修飾語句を取ることができることに注意されたい(=(29c))

- (29) a. Peter **sparkade upp** bollen.
 Peter kick.PAST up ball.DEF
 ‘Peter kicked up the ball’
- b.*Peter **sparkade** längre **upp** bollen.
 Peter kick.PAST further up ball.DEF
- c. Peter **sparkade** bollen längre **upp**.
 Peter kick.PAST ball.DEF further up

以上見てきたように、スウェーデン語の不変化詞は補部だけでなく、指定部も取らない。つまり、投射があるとする積極的な根拠はなく、スウェーデン語の不変化詞には投射がないという Toivonen の主張は妥当であると思われる。

以上、不変化詞動詞の統語的特徴をまとめると以下のようなになる。

- (30) a. 不変化詞は動詞句内で動詞の直後、目的語名詞句の直前に現れる。
 b. 不変化詞は指定部と補部を取らない語である。

^{*3} Toivonen (2002, 2003) は意味的な観点から、補部の有無を論じているが、意味構造と統語構造を別のものであるとする立場を取るかぎり、統語的な証拠から補部の有無を論じるべきである。

2.3 音韻的特徴

次に、不変化詞動詞の音韻的な特徴を見てみよう。「動詞・前置詞・名詞句」といった連鎖があった場合、通常、動詞と名詞句にはアクセントが置かれるが、前置詞にはアクセントが置かれない。一方、不変化詞動詞においては、通常アクセントを有する動詞のアクセントが消え、不変化詞がアクセントを担い、動詞と不変化詞で一つのアクセントユニットを成すと言われている (Anward & Linell 1976)。例えば、動詞 *hälsa* 'greet' と前置詞・不変化詞 *på* 'on' から成る次の例を見てみよう。アクセントが置かれる音節を大文字で表している。

- (31) a. PEter **HÄL**sade på henne.
 P. greet.PAST on her
 'Peter greeted her.'
- b. PEter **hä**lsade **PÅ** henne.
 P. greet.PAST on her
 'Peter visited her.'

(31a) では動詞がアクセントを持ち *på* 'on' はアクセントを有しないことから、動詞・前置詞の連鎖であることが分かる。全体としての意味も、動詞と前置詞の意味から合成的に得られる。一方、(31b) は動詞にアクセントが置かれず、*på* 'on' がアクセントを担っていることから不変化詞動詞であることがわかる。不変化詞動詞の意味はしばしばイディオム的であることが多いが、(31b) も動詞と *på* 'on' の意味を足して得られるものではなく、不変化詞動詞であると考えられる。

2.4 形態論的特徴

最後に不変化詞動詞の形態論的特徴を見てみよう。これまで見てきたようにスウェーデン語の不変化詞動詞は基本的に形態的に一語を成すことはない。しかし、動詞が過去分

詞^{*4}であるときに、動詞に前接し、動詞と不変化詞が一語を成す。

- (32) a. Peter **sparkade upp** bollen.
 P. kick.PAST up ball.DEF
 ‘Peter kicked away the ball.’
- b. Bollen. blev { **upp-sparkad** /***sparkad upp** } av Peter
 ball.DEF become.PAST up-kick.PASTP kick.PASTP up by P.
 ‘The ball was kicked away by Peter.’

2.5 不変化詞のカテゴリー

以上、スウェーデン語の不変化詞動詞の統語的・音韻的・形態的特徴を見てきた。このような特徴をもつスウェーデン語の不変化詞には次のようなものがある。まずは、(33)、(34)のような前置詞・副詞としての用法を持つものである。

(33) 前置詞としての用法を持つ不変化詞

av ‘off’, *efter* ‘after’, (*i*)*från* ‘from’, (*i*)*genom* ‘through’, *i* ‘in’, *med* ‘with’, *om* ‘around’, *på* ‘on’, *till* ‘to’, *under* ‘under’, *ur* ‘from, out of’, *åt* ‘to, toward’, *över* ‘over’ etc.

(34) 副詞としての用法を持つ不変化詞

bort ‘away’, *dit* ‘thither’, *fram* ‘forward’, *hem* ‘home’, *hit* ‘hither’, *in* ‘in’, *ner* ‘down’, *ned* ‘down’, *samman* ‘together’, *upp* ‘up’, *undan* ‘out of the way, away’, *ut* ‘out’ etc.

さらに、スウェーデン語には (35) のように前置詞句に由来する不変化詞も存在する。これらは、前置詞とその目的語名詞句が一語化したものである。

(35) 前置詞句に由来する不変化詞

i-gen (in-straight) ‘again, closed, covered’, *i-hjäl* (in-hell) ‘to death’, *i-hop* (in-heap)

^{*4} 一般に、ゲルマン系の言語では過去分詞は受動と完了の2つの機能を持つが、スウェーデン語では主に受動の機能を持つ。完了は *supinum* と呼ばれる別の活用形が用いられる。

‘together’, *i-sär* (in-separation) ‘apart’, *i-tu* (in-two) ‘into two’, *i-väg* (in-way) ‘away, off’, *till-baka* (to-back) ‘back’ etc.

ihjäl ‘to death’ を例に見てみよう。この不変化詞は元々 *i* ‘in(to)’ と *hjell* ‘hell’ からなる前置詞句だったものが一語化したものである (Wessen 1960)。これまでに見た統語的・音韻的・形態的特性から不変化詞であるということが分かる。以下では統語的特性と形態的特性を見てみよう。

- (36) a. Peter **sköt** (**ihjäl**) Sven (***ihjäl**).
 P. shoot.PAST to.death S. to.death
 ‘Peter shot Sven to death.’
- b. Sven blev { **ihjäl-skjuten** / ***skjuten ihjäl** }
 S. become.PAST to.death-shoot.PASTP shoot.PASTP to.death
 ‘Sven was shot to death.’

(36a) から分かるように、*ihjäl* は目的語名詞句よりも前に現れなければならない。また、動詞が過去分詞となる (36b) の受動文では、*ihjäl* が動詞に前接し形態的な語を成している。以上から、*ihjäl* は不変化詞と同じ振舞いをするということが出来る。一方、意味的に類似はしているが前置詞句である *till döds* ‘to death’ は不変化詞としての振舞いを見せない。(37a) から分かるように、*till döds* が目的語名詞句より前に現れることはなく、また動詞が過去分詞でも動詞に前接することはない (= (37b))。

- (37) a. Peter **sköt** (***till döds**) Sven (**till döds**).
 P. shoot.PAST to death S. to.death
 “Peter shot Sven to death.”
- b. Sven blev { ***tilldöds-skjuten** / **skjuten till döds** }
 S. become.PAST to.death-shoot.PASTP shoot.PASTP to death
 “Sven was shot to death.”

さて、前置詞や副詞はどのゲルマン系言語の不変化詞動詞研究でも、不変化詞として認められているが、2.1 でも述べたように、それ以外の語彙範疇の語も不変化詞として認める立場がある。ここでは前置詞や副詞としての用法を持つ不変化詞と同じ特徴を示すそれ

以外の語彙範疇があれば，それも不変化詞であると認めることにする．以下では，形容詞・名詞・動詞の順に，スウェーデン語において不変化詞として認めることができるかどうか考察する．

2.5.1 形容詞

以下の形容詞が不変化詞としての振舞いを示す (Teleman et al. 1999b) ．

(38) 形容詞としての用法を持つ不変化詞

fast ‘firm, fixed’, *färdig* ‘finished’, *loss* ‘loose, off’, *lös* ‘loose’, *rent* ‘clean’, *sönder* ‘broken’ etc.

sönder ‘broken’ を例に見てみよう．(39a) にあるように，*sönder* は目的語名詞句に先行する．また (39b) から分かるように，動詞が過去分詞であるときに，動詞に前接し，形態的な語を成す．

(39) a. Peter **sparkade** (**sönder**) dörren (***sönder**).

P. kicked.PST broken door.DEF broken

‘Peter kicked the door broken.’

b. Dörren blev { **sönder-sparkad** / * **sparkad sönder** }

door.DEF become.PAST broken-kick.PASTP kick.PASTP broken

‘The door was kicked broken.’

以上から，一部の形容詞は，前置詞や副詞としての用法を持つ不変化詞と同じ振舞いを示すため，不変化詞と認めることができる．

2.5.2 名詞

次に，名詞が不変化詞として認められるか考察しよう．スウェーデン語には動詞と冠詞を伴わない裸名詞からなるイディオム的な組み合わせが多数存在する．以下はその一例である．

- (40) *köra bil* (drive car) ‘drive a car’, *skriva brev* (write letter) ‘write a letter’, *röka pipa* (smoke pipe) ‘smoke a pipe’, *ha feber* (have feber) ‘have a feber’, *ta plats* (take place) ‘take a seat’, *äga rum* (own room) ‘take place’,

これらの動詞と裸名詞の組み合わせは、しばしば不変化詞動詞としてみなされることがある。一つには、これらの組み合わせにおいては、動詞のアクセントが落ち、名詞がアクセントを担うため、一般的な不変化詞動詞と同じアクセントパターンを示すためである (Anward & Linell 1976)。また別の理由としては、裸名詞が冠詞や修飾語句を取らないために、投射しない語であると考えられるためである (Toivonen 2002, 2003)。

更に Toivonen (2003) は提示文に現れる裸名詞の振舞いから、それが不変化詞であることを明らかにしている。次の例文を見てみよう。

- (41) a. Ett repertoarmöte skall **äga rum**.
 a repertoire.meeting will own room
 ‘A repertoire meeting will take place’
- b. Det skall **äga rum** ett repertoarmöte.
 it will own room a repertoire.meeting
 ‘A repertoire meeting will take place’ (Toivonen 2003 87)
- c.*Det skall **äga** ett repertoarmöte **rum**.
 it will own a repertoire.meeting room

(41a) は動詞と裸名詞 (*äga rum* (own room) ‘take place’) を含んだ通常の文である。一方、(41b) は 2.2.1 で見た提示文 (presentational sentence) と呼ばれるものである。注目したいのは裸名詞の *rum* ‘room’ の現れる位置である。(41b) から分かるように、裸名詞 *rum* ‘room’ は論理的主語である *ett repertoarmöte* ‘repertoire meeting’ の直前に置かれ、それより後に置かれることはない (= (41c))。仮に裸名詞が不変化詞だとすると、動詞 + 裸名詞 (= 不変化詞) + (論理的主語) 名詞句という語順になり、通常の不変化詞動詞と同じ語順である。以上の理由から、動詞と裸名詞の組み合わせにおける裸名詞は不変化詞であるとみなすことができる。

以上，音韻的・統語的特徴から，動詞と裸名詞の組み合わせは不変化詞動詞の一種とみなすことができる。

2.5.3 動詞

最後に動詞について見てみよう。Toivonen (2003) は次のような使役構文に現れる使役動詞と動詞の組み合わせも，不変化詞動詞の一種とみなしている。

- (42) Peter **lät** **bygga** ett hus.
 P. let.PAST build.INF a house
 ‘Peter had a house built.’

Toivonen は Taraldsen (1991) の説を受け，上記の使役動詞 *lät* ‘let’ に続く不定形動詞 *bygga* ‘build’ が不変化詞であると主張している。Taraldsen (1991) によると，スウェーデン語・デンマーク語・ノルウェー語における不変化詞と目的語名詞句の語順と使役動詞に続く不定詞と目的語名詞句の語順が完全な並行性を示すという。次のスウェーデン語とデンマーク語の不変化詞動詞の例を見てみよう。((43), (44) は (Sells 2001: 44) から引用。)

- (43) a. Peter **kastade** (**bort**) tappan (***bort**) (Swedish)
 Peter throw.PAST away carpet.DEF away
 ‘Peter threw away the carpet.’
 b. Peter **smed** (***ud**) tæppet (**ud**) (Danish)
 Peter throw.PAST away carpet.DEF away

上の例からも分かるように，スウェーデン語では不変化詞が目的語に先行しなければならないのに対し，デンマーク語では目的語のあとに来なければならない。次に，使役構文の例を見てみよう。

- (44) a. Peter **lät** (**dammsuga**) tappan (***dammsuga**) (Swedish)
 Peter let.PAST vacuume.clean carpet.DEF vacuume.clean
 ‘Peter had the carpet vacuumed.’
 b. Peter **lod** (***støvsuge**) tæppet (**støvsuge**) (Danish)
 Peter let.PAST vacuume.clean carpet.DEF vacuume.clean

興味深いことに不変化詞動詞の場合と同じ分布を示していることがわかる。つまり、スウェーデン語では不定形の動詞が目的語名詞句より前に現れるのに対し、デンマーク語では目的語名詞句の直後に現れるのである。Taraldsen は以上のような分布の並行性から、使役構文に現れる不定形の動詞が、句構造上、不変化詞と同じ位置に現れるものとしている。Toivonen は以上を踏まえた上で、動詞も不変化詞になりうると仮定している。Toivonen は指摘していないが音韻的特徴も不変化詞のそれと同じである。使役動詞にアクセントはなく、それに続く不定形動詞がアクセントを担い、不変化詞動詞の場合と同じアクセントのパターンを示す。

しかし、Toivonen 自身も気づいていることだが、この使役構文に現れる動詞を不変化詞とすることには、いくつかの問題点が存在する。一つは動詞の目的語である。(42)でも(44a)でも不定形動詞の目的語に当たる *ett hus* ‘a house’ と *tappan* ‘the carpet’ が現れている。これは、動詞が補部を取っていると考えることができ、そうすると、これらの不定形動詞は投射していることになる。Toivonen はこれらの目的語は不定形の動詞の目的語ではなく、使役動詞と不定形動詞の複雑述語全体が取る目的語だとしている。しかし、その根拠は挙げていない。

問題となるのは、目的語名詞句が動詞の補部の位置にあるかどうかである。次の例を(42)と比較して見てみよう。

(45) **Bygga** ett hus **lät** Peter göra
 build.INF a house let.PAST P. do.

上の例からも分かるように、不定形の動詞 *bygga* ‘build’ と目的語名詞句 *ett hus* ‘a house’ は文頭に置き、話題化することができる。両者は構成素を成しており、不定形の動詞は補部を取っていることになる。したがって、不定形の動詞は投射しているわけで、不変化詞であると認めることはできない。

また、もし使役動詞の補文に現れる動詞が不変化詞だとすると、すべての動詞が不変化詞になりうるということになる。一般に不変化詞は、前置詞や副詞のように閉じた類であるか、名詞や形容詞のように開いた類でも、そのなかの限られたもののみが不変化詞とし

での資格を持つ。

以上のような問題点を持つことから、本稿では動詞を不変化詞とは認めないものとする。

第3章 先行研究とその問題点

3.1 はじめに

この章ではスウェーデン語の不変化詞動詞に関する先行研究を概観し、その問題点を指摘する。2章でみたように、不変化詞は前置詞や副詞などとは異なった振舞いを見せ、一つのクラスを成すと考えられる。しかし、この不変化詞における一様な振舞いをどのレベルで一般化できるかという点に関して、先行研究は大きく異なっている。具体的には、次のような先行研究がある。

- 不変化詞が独立した品詞 (syntactic category) を成すとする先行研究
- 不変化詞が独立した文法関係 (grammatical relation) を成すとする先行研究
- 不変化詞を意味の観点から規定しようとする先行研究
- 不変化詞を統語的な観点から規定しようとする先行研究

以下では先行研究を順を追って見ていく^{*1}。

3.2 不変化詞の統語範疇

Thorell (1977), Holms and Hinchliff (1993), Teleman, Hellberg, and Andersson (1999a) などの一般的なスウェーデン語の記述文法書において、不変化詞は副詞に下位分類されることが多い。また、ゲルマン系言語の不変化詞一般に関しては、その統語範疇は前置詞であるという説が広く受け入れられてきた (Jespersen 1924, Emonds 1972, Riemsdijk 1978)。これらの研究では、副詞・前置詞のどちらに分類されるにしても^{*2}、不変化詞が独立した品詞ではないという点では一致している。本稿でも、不変化詞は独立した品詞はなさない

^{*1} 1章でも述べたように、不変化詞動詞の先行研究のうち、不変化詞の多義性の問題を扱った研究は含まない。

^{*2} 本研究では副詞と前置詞が別々の品詞かどうかという点には立ち入らない。

という立場を取る。

しかし、先行研究の中には不変化詞が独立した品詞であるという主張も見られる (Andersson 1977, Jørgensen & Svensson 1986, Norén 1996)。これらの研究では、品詞を決定する基準を示していない為に、どのような根拠からスウェーデン語の不変化詞を独立した統語範疇として認定しているかが明確ではない。名詞や動詞のように屈折変化のある語の場合、品詞の認定は容易であるが、前置詞や不変化詞のように屈折変化のない語の場合は、それ以外に品詞判定の根拠を求めなければならない。

現在のところ、不変化詞が独立した品詞を成さないという証拠は見つけれないが^{*3}、しかし一方で、不変化詞が独立した統語範疇を成すという積極的な証拠がみられないのも事実である。したがって、本稿では不変化詞は独立した品詞を成さないという立場を取ることにする。

3.3 不変化詞の文法機能

次に不変化詞が特定の文法機能 (grammatical function) を持っているとする Ejerhed (1979) の主張を見てみよう。Ejerhed によると、不変化詞は主語や目的語などと同様に partikelfunktion (particle function) という文法機能を担っていると主張している。Ejerhed (1979) によると、主語や目的語が句構造の特定の位置を占めるように、不変化詞も特定の位置に生起すると主張している。

彼の主張は、主語・目的語といった文法関係が句構造上の位置から決定されるとする初

^{*3} Toivonen (2002: 192–194) は 2 つの根拠を基に不変化詞を独立した統語範疇として扱うことを否定している。前章でも見たように、前置詞や副詞以外に名詞・形容詞・動詞の中にも不変化詞と同じ振舞いをするものがある。それらすべてを一つの品詞としてみなす事には無理があると、彼女は主張する。しかし、ある語が二つ以上の品詞として機能することはしばしばある。また、動詞や名詞などが文法化して、側置詞として機能するようになることはよく知られた現象であり、様々な品詞が不変化詞へと文法化したと考えることもできる。したがって、彼女の一目の主張は、不変化詞の品詞としての独立性を否定するものとは言えない。

彼女のもう一つの主張は、品詞と統語的な位置の関係についてである。スウェーデン語の不変化詞が動詞句内で動詞の直後に位置することはすでに見たが、このような統語的な位置を根拠に品詞を決定することはできないと彼女は主張する。彼女のこの主張自体は正しいと思われるが、前章でも見たように、スウェーデン語の不変化詞の特徴は統語的な分布だけではない。不変化詞にみられるその他の特徴も品詞の判定に関わらないものかどうかは検討されるなければならない。

期の生成文法以来踏襲されていた立場に立っている。一方で、関係文法や LFG では文法関係は、句構造上の位置から決定されず、定義不可能な要素であるとされる。ここでは、どちらの立場が正しいかという議論はせず、彼の主張の問題点を考えて行きたい。

一つの問題点は、そもそも *partikelfuktion* (particle function) という文法関係を認めることができるかどうかである。一般に認められている文法関係には、主語 (subject)・目的語 (object)・斜格語 (oblique)・付加語 (adjunct) がある。さらに、LFG では埋め込み文に相当する COMP という文法関係が認められている。しかし、*partikelfunction* という文法機能を設定している文法理論はなく、それが一体どのような文法関係であるのかが追及されなくてはならない。

もう一つの問題点は、不変化詞が本当に唯一の文法関係を担うのかどうかという点である。次の文を見てみよう。

- (46) Peter **kastade** (**ut**) bollen. (付加語)
 P. throw.PAST out ball.DEF
 ‘Peter threw out the ball.’
- (47) Peter **lade** *(**ner**) brevet (på bordet). (斜格語)
 P. lay.PAST down letter.DEF on table.DEF
 ‘Peter laid down the letter (on the table).’
- (48) Peter **körde** **bil** igår. (目的語)
 P. drive.PAST car yesterday
 ‘Peter drove a car yesterday.’
- (49) Peter har **slagit** **ihjäl** henne. (XCOMP)
 P. has beat.PERFP to.death her
 ‘Eric has beaten her to death.’
- (50) Peter **tycker** **om** choklad. (述語の一部)
 P. think.PRES about chocolate
 ‘Peter loves chocolate.’ *4

*4 この例は一見すると不変化詞ではなく前置詞を含んだイディオムを含む文のようにも見えるが、不変化詞動詞を述語とする文である。というのも、主動詞が過去分詞の場合には、*om* ‘about’ が動詞に前接する。

以上の例における不変化詞は様々な文法機能を担っているように見える。(46)では、不変化詞 *ut* ‘out’ は省略可能であることから、付加語であると考えることができる。一方、(47)では、不変化詞 *ner* ‘down’ は三項の動詞 *lägga* ‘lay’ の項つまり斜格語として機能していると考えられる。また、(48)からもわかるように、裸名詞 *bil* ‘car’ は動詞の目的語として機能している。(49)において、不変化詞 *ihjäl* ‘to death’ は一種の結果述語のように振舞っていることから、一種の補文(LFGにおける XCOMP)であるようにも見える。最後に、(50)を見てみよう。(50)では *tycka* ‘think’ という動詞と *om* ‘about’ という不変化詞がイディオムを成していることから、不変化詞 *om* は述語の一部であると言えよう。

以上、見てきたように不変化詞は様々な文法機能を担っているとも考えられ、不変化詞を文法機能の観点から一般化することができるとは言えない。

3.4 不変化詞の意味機能

不変化詞を意味機能の観点から一般化しようとする試みも存在する。そのような試みの多くは、不変化詞を含む文をアスペクトの観点から分析している。

Teleman et al. (1999b) などの多くのスウェーデン語の研究で、不変化詞には文のアスペクトを非限界的 (atelic) から限界的 (telic) へと変える機能があると述べている。これはスウェーデン語ばかりではなく、英語やドイツ語の不変化詞研究でも繰り返し述べられてきたことである。

ところが、Norén (2000) はこのような見方が間違いであることを示している。

- (51) a. Hon **skrev** **upp** bilnumret.
 she write.PAST up car.number.DEF
 ‘She wrote down the car number.’
- b. Hon skrev bilnumret.
 she write.PAST car.number.DEF
 ‘She wrote the car number.’

Choklad är om-tyckt av alla.
 chocolate be.PRES about-think.PASTP by all
 ‘Chocolate is loved by all.’

(52) a. Hon **skrev** **upp** bilnummer.
 she write.PAST up car.number.PL
 ‘She wrote down car numbers.’

b. Hon skrev bilnummer.
 she write.PAST car.number.PL
 ‘She wrote car numbers.’

(Norén 2000:391)

(51a) の文の aspekter は確かに限界的であるが、それは不変化詞によるものではない。というのも、不変化詞のない (51b) がすでに限界的であるわけで、(51a) が不変化詞により限界的になったわけではない。また、(52a) の文は不変化詞を含むにも関わらず、非限界的である、これは不変化詞を含まない (52b) の aspekter と同様である。これらの文で、aspect の決定に関わっているのは不変化詞ではなく、目的語名詞句の定性と数である。

以上の例は、不変化詞を含まない文と含む文の aspekter が同じ例であったが、次のような例の存在も指摘している。

(53) a. Hon sprang { i/på } två minuter.
 she run.PAST for/in two minutes

‘She ran for two minutes / She ran to somewhere in two minutes.’ *⁵

b. Hon sprang ut { *i/på } två minuter.
 she run.PAST out for/in two minutes

‘* She ran out for two minutes. /She ran out in two minutes.’

(53a) の文は aspekter 的に中立で限界的にも非限界的にも解釈することができる。一方、不変化詞を含んだ 53b は限界的解釈しか許さない。

以上の観察から、Norén (2000) は次のような仮説を立てている。

(54) 不変化詞は文にすでに存在する aspekter に焦点を当てるか、あるいは aspekter の点で中立的な文の aspekter を決定する。

*⁵ 英語で ‘She ran in two minutes.’ と言った場合、走り出すまでの時間が 2 分かかったという意味になるが、それに対応するスウェーデン語文では、「(どこかまでを) 2 分で走った」という意味になる。

Norén (2000) の仮説は、「文にすでに存在するアスペクトに焦点を当てる」という機能が具体的にはどのような事なのかが明らかではない点に問題があるものの、非常に示唆に富んだものであると思われる。

ここでは、上記の仮説で提示された意味機能から不変化詞を規定することができるかどうか考えてみよう。アスペクトの点で中立的な文のアスペクトを決定する要素は不変化詞以外にも存在するだろうか？例えば、次の文は前置詞句を含み、文のアスペクトは限界的である。

(55) Hon sprang till stationen { *i/på } två minuter.

she ran to station.DEF for/in two minutes

*She ran to the station for two minutes/ She ran to the station in two minutes.'

したがって、同様の機能を持つものが不変化詞以外にも存在するので、アスペクトという意味機能の観点からのみ、不変化詞を決定することは無理であるように思われる。

3.5 不変化詞の統語的特徴

スウェーデン語の不変化詞の統語的ステータスをめぐっては、これまで「接語のような要素 (clitic-like element)」であるという分析 (Holmberg 1984, Josefsson 1998) と「投射のない語 (non-projecting word)」であるという分析 (Toivonen 2002, 2003) が提案されてきた。本節では、より詳細な分析をしている後者を概観し、その問題点を述べる。

Toivonen (2002, 2003) は 2.2.4 でも見たように、スウェーデン語の不変化詞は「投射のない語」(non-projecting word) つまり、指定部や補部を取らない要素であり、スウェーデン語の不変化詞は、意味構造や文法関係のレベルではなく、句構造のレベルで一般化できると主張している。関連する彼女の主張を以下にまとめる。

(56) a. スウェーデン語の不変化詞は投射のない語である。

b. 投射の有無は語ごとに指定されている。

c. 投射のない語は 次の句構造規則に従い、 V^0 に主要部付加する。

V^0 V^0 X (X は語彙範疇)

d. 投射がないという点以外は，他の語と同じである．

彼女によれば，語の投射は語ごとに指定されていて，投射のない語は (56c) にある特別な句構造規則に従う．2章で見た不変化詞の統語的な特徴はこの句構造規則によるものである．また，不変化詞は投射がないという点以外は，他の語となんら変わらないと主張している．

本稿では，彼女の主張のうち (56b) (56d) に問題があると考ええる．まず，(56b) についてであるが，Toivonen は語の投射の有無は意味構造や文法機能といったものの影響によるものではなく，最初から指定されているものであると主張している．この点に関しては，次節で詳細に反論することとなるが，本稿では投射の有無は意味構造の反映であると主張する．

次に，(56d) を考えてみよう．Toivonen によると，次の (57a) と (57b) の違いは二次述語である *ihjäl* ‘to.death’ と *blodig* ‘bloody’ の投射の有無のみで，どちらも結果構文であると主張．つまり，両者は句構造が違うだけで，文法関係や意味構造は変わらないという主張を展開している．

- (57) a. Eric har slagit **ihjäl** ormen.
 E. has beaten to.death snake.the
 ‘Eric has beaten the snake to death.’ Toivonen (2003: 2)
- b. Eric har slagit ormen **blodig**.
 E. has beaten snake.the bloody
 ‘Eric has beaten the snake bloody.’ (ibid.)

しかし，両者の文法関係が同一であるとする Toivonen の主張は疑わしい．以下，問題点を見ていこう．2章でも見たように，スウェーデン語の不変化詞の中には形容詞としての用法を持つもの存在する．一般に，スウェーデン語の形容詞は主語名詞句の性と数に一致する．

	Singular	Plural
Non-neuter	färdig- \emptyset	färdig-a
Neuter	färdig-t (default)	färdig-a

表 3.1 形容詞 *färdig* ‘finished, ready’ の一致のパラダイム

これらの形容詞が結果構文の結果述語として用いられたときには、目的語名詞句との間で性と数に関して一致を示す。これは、目的語名詞句が形容詞の論理的な主語であることを示している。

- (58) a. Han skrev uppsatsen färdig- \emptyset . (結果構文)
 he wrote paper.DEF.Non-Neuter.Sg finished-Non-Neuter.Sg
 ‘He finished writing the paper.’
- b.*Han skrev uppsatsen färdig-t.
 he wrote paper.DEF.Non-Neuter.Sg finished-Neuter.Sg
- c.*Han skrev uppsatsen färdig-a.
 he wrote paper.DEF.Non-Neuter.Sg finished-Pl

興味深い点は、形容詞が不変化詞として用いられたときには論理的な主語との一致を見せず、デフォルトの一致を取るということである。

- (59) a.*Han skrev färdig- \emptyset . uppsatsen (不変化詞構文)
 he wrote finished-Non-Neuter.Sg paper.DEF.Non-Neuter.Sg
 ‘He finished writing the paper.’
- b. Han skrev färdig-t. uppsatsen
 he wrote finished-Neuter.Sg paper.DEF.Non-Neuter.Sg
- c.*Han skrev färdig-a. uppsatsen
 he wrote finished-Pl paper.DEF.Non-Neuter.Sg

詳しくは5章で見るが、以上の現象は結果構文と不変化詞動詞構文における文法関係が異なることを示している。従って、結果構文と不変化詞構文における違いが、結果述語の投射の有無のみであるとする Toivonen の主張には問題がある。

以上ここまでで順に見てきたように、スウェーデン語の不変化詞を、統語範疇・文法関係・意味関係・統語構造の観点から一般化しようとしたこれまでの試みにはそれぞれ問題

があることを見た．次節では意味構造における一般化を提案する．

第4章 意味構造における非語彙的抱合

4.1 はじめに

本章では、スウェーデン語の不変化詞動詞が形態的には語を成していないが、意味のレベルにおいて一つの語を成しているということを主張する。つまり、形態的な語と意味的な語の間にミスマッチがあるということを指摘する。このようなミスマッチを示す現象で、近年研究が盛んになっているものに意味的抱合 (semantic incorporation) と呼ばれる現象がある (Farkas (2003), Dayal (2003), Asudeh and Mikkelsen (2000) など)。形態的には抱合を起こしてはいないが、通常の抱合で見られるのと同じ意味的な振舞いを示すために、意味的抱合と呼ばれる。本稿では後に説明する理由により意味的抱合という用語ではなく非語彙的抱合 (non-lexical incorporation) という用語を用いる。以下ではまず、通常の抱合と非語彙的抱合について概観したあと、スウェーデン語の不変化詞が非語彙的抱合、つまり意味構造において抱合を起こしているということを明らかにする。

4.2 抱合

抱合に関する研究は膨大であるが、この節では本稿に関わる部分を中心に、簡単に概観することにする (より詳しくは、Mithun (1984, 1986), Baker (1988, 1996) など参照のこと)。次の (60) モホーク語の例文を見てみよう。

- (60) a. Yao-wir-aʔa ye-nuhweʔ-s ne ka-nuhs-aʔ
 PRE-baby-SUF 3fS/3N-like-ASP the PRE-house-SUF
 ‘The baby likes the house.’

- b. Yao-wir-aʔa ye-nuhs=nuhweʔ-s
 PRE-baby-SUF 3fS/3N-house=like-ASP

(Baker 1988: 81-82)

(60a) では *ka-nuhs-a?* ‘the house’ という目的語名詞句は一つの語として独立している。一方, (60b) では, *nuhs* という名詞語幹は動詞と共に一つの語を成している。このようにある語幹が主に動詞と複合し一種の複雑述語を形成する現象はアメリカ先住民族の言語などで多く見られ, 抱合 (incorporation) と呼ばれている。

さて, (60b) では目的語名詞句に相当する名詞語幹つまり, 項が抱合されている^{*1}。しかし, 項ばかりでなく付加詞を抱合する言語もあると言われている (Spencer (1995), Rivero (1992))。次のチュクチ語の例を見てみよう。

- (61) a. *n-ure-w* *tajalqetg?ek*
 ADV-long-ADV I.slept
 ‘I slept for a long time.’
- b. *t-ure=jalqet-g?ek*
 1SG.S-long=sleep-1SG.S
- (Spencer (1995: 456))

(61b) を見ると, *ure* ‘long’ という形容詞語幹が動詞と共に一つの語を成しているのが分かる。この形容詞語幹は (61a) の *n-ure-w* ‘a long time’ と比較すると分かるように, 付加詞が抱合されたものである。このように, 抱合には項の抱合だけでなく付加詞の抱合も存在する。

抱合を起こした文には, 次の (62) に列挙するような特徴が見られる Mithun (1984, 1986), Baker (1988, 1996) など参照のこと)。

- (62) a. 抱合された名詞は数に関してニュートラルである。
 b. 抱合された名詞は非特定の (non-specific) である。
 c. 抱合を起こしたできた述語は慣習化した行為 (institutionalized activity) を表す。
 d. 抱合された名詞は決定詞 (determiner) を取らない。

以上, 抱合に関する特徴を概観してきた。次に本章で問題となる別のタイプの抱合を見ていこう。

^{*1} 項の中でも抱合されるのは目的語名詞句に相当する名詞語幹, さらに非対格動詞の主語名詞句に相当する名詞語幹である。項であっても非能格動詞の主語名詞句は抱合されない。

4.3 非語彙的抱合

語彙的な抱合を起こしていなくても、動詞と目的語名詞の組み合わせが (62) に見られるような特徴を示す言語があることが報告されている。次の (63) デンマーク語の例を見てみよう。

- (63) a. Min nabo købte et hus sidste år.
 my neighbour bought a house last year
 ‘My neighbour bought a house last year.’ (Asudeh and Mikkelsen (2000: 2))
- b. Min nabo **købte hus** sidste år.
 my neighbour bought house last year
 ‘My neighbour did house-buying last year.’
 ~ ‘My neighbour bought a house last year.’ (Asudeh and Mikkelsen (2000: 2))

(63a) は抱合を起こしていない通常の文である。(63a) の目的語名詞句 *et hus* ‘a house’ は不定冠詞 *et* を取り、ある特定の家を指す。一方、(63b) は動詞と冠詞を取らない裸名詞からなる例である。この例も語彙的な抱合を起こしていないことは次の (64a) (64a) を見れば明らかであろう。

- (64) a. **Købte** min nabo **hus** sidste år?
 bought my neighbour house last year
 ‘Did my neighbour do house-buying last year?’
 ~ ‘Did my neighbour buy a house last year?’
- b.***Købte hus** min nabo sidste år?
 bought house my neighbour last year

デンマーク語では疑問文を形成する際、定形動詞が主語名詞句の前に置かれるが、その際 (64b) のように動詞だけがその位置に置かれ、(64b) のように動詞と裸名詞が共に文頭に位置することはない。従って、動詞と裸名詞が語を成していないのは明らかである。一方で、動詞と裸名詞は語彙的な抱合と同じ特徴をいくつか示す。目的語名詞 *hus* ‘house’ は冠詞を取らず、特定の家を指さない。また、‘*did house-buying*’ という訳からも分かる

ように慣習化された活動を表している。つまり、(63b)の文は名詞語幹が動詞に語彙的な抱合を起こしてはいないにも関わらず、(62)に挙げられた抱合に見られる特徴を示しているわけである*2。

このような現象はヒンディー語、ハンガリー語、ニウエ語など広範に観察され、意味的抱合 (semantic incorporation) (van Geenhoven (1998), Farkas (2003))、擬似抱合 (pseudo incorporation) (Dayal (2003), Massam (2001)) などと呼ばれ、近年多くの研究が発表されている。これらの研究で一致しているのは、動詞と名詞が統語構造では抱合を起こしていないが、意味構造では抱合を起こしているという点である。その点で意味的抱合という用語は的を射ているように思われる。しかし、通常の抱合でも統語構造だけでなく意味構造においても抱合は起こっている。つまり、どちらのタイプの抱合でも意味的抱合は起こっているので、本稿では意味的抱合という用語は用いないことにする。一方、擬似抱合という用語は、統語構造では抱合が起こっていないことを示しているものと思われるが、以下ではもう少し具体的に、非語彙的抱合 (non-lexical incorporation) という用語を使うことにする。また、4.2 で見た通常の抱合は語彙的抱合 (lexical incorporation) と呼ぶことにする。

ところで、4.2の語彙的抱合には、項の抱合と付加詞の抱合があることを見た。これまで報告されている非語彙的抱合は項の抱合のみであり、付加詞の抱合についての報告はない。抱合を語彙的抱合か非語彙的抱合か、また項の抱合か付加詞の抱合かという点からまとめると次の表のようになる。

*2 ただし、(62a)の特徴に関する記述は Asudeh and Mikkelsen (2000) には見られなかった。

	語彙的抱合	非語彙的抱合
項のみ	アメリカ先住民諸語など (Baker 1988) (Mithun 1984) などの名詞抱合	ハンガリー語 (Farkas and de Swart 2003) ヒンディー語 (Dayal 2003) デンマーク語 (Asudeh and Mikkelsen 2000) などの名詞抱合
付加詞	ギリシア語 (Rivero 1992) チュクチ語 (Spencer 1997) などの副詞抱合	

表 4.1 抱合のタイプ

上記の表では付加詞の非語彙的抱合の部分が空白であるが、本稿ではスウェーデン語の不変化詞動詞がその空白を埋める現象であるという主張を展開する。

4.4 不変化詞動詞における非語彙的抱合

4.4.1 問題点

(62) に見られる抱合の特徴は (62c) を除いて、名詞の抱合にのみ見られる特徴である。文法数 (62a) は名詞に見られるカテゴリーであり、特定性 (62b) も名詞に関わるものである。また、決定詞 (62d) も名詞を修飾するものである。スウェーデン語の不変化詞の多くは前置詞や副詞であるから、これらの特徴で当該の現象が非語彙的抱合であると同定することはできない^{*3}。

そこでこの節では、別の観点からこの問題を探っていくことにする。スウェーデン語に見られる別の抱合の現象と不変化詞動詞の共通点あるいは相関を観察することにより、不変化詞動詞が非語彙的抱合を起こした結果であるということを明らかにする。まず、4.4.1 では 4.3 で見たデンマーク語の非語彙的抱合と同じ現象がスウェーデン語にもあることを示し、それと不変化詞動詞との共通点を見る。次に、4.4.2 では一種の語彙的抱合と見なすことのできる複合動詞と不変化詞動詞の関係を探ることにより、スウェーデン語の不変

^{*3} ただし、(62d) については、決定詞が指定部の位置に現れるものであるとすると、スウェーデン語の不変化詞は指定部を持たないという特徴を一致することになる。

化詞動詞が非語彙的抱合の結果であることを明らかにする。

4.4.2 非語彙的抱合と不変化詞動詞

4.3 で見たデンマーク語の動詞と名詞の組み合わせは、2.5.2 で見たスウェーデン語の現象と同様である。2.5.2 では、動詞と裸名詞の組み合わせが不変化詞動詞の一種であるとした。これは音韻的な特徴と語順において、他の不変化詞動詞と同じ振舞いを示すためである。したがって、スウェーデン語の動詞と裸名詞の組み合わせが非語彙的抱合であることを示せば、間接的にはあるが、他の不変化詞動詞も非語彙的抱合の一種であると言うことができるはずである。次の (65) を見てみよう。

- (65) a. Peter **köpte** ett **hus**.
 P. buy.PAST a house
 ‘Peter bought a house.’
- b. Peter **köpte** **hus**.
 P. buy.PAST house
 ‘Peter did house-buying./Peter bought a house.’

(65a) は通常の動詞と名詞句の組み合わせである。一方、(65b) は動詞と冠詞のついていない裸名詞の組み合わせである。これが語彙的な抱合を起こして形態的な一語になっていないことは次の (66a) と (66b) から明らかであろう。

- (66) a. **Köpte** Peter **hus**?
 buy.PAST P. house
 ‘Did Peter do house-buying?/Did Peter buy a house?’
- b. ***Köpte** **hus** Peter?
 buy.PAST house P.

スウェーデン語でも疑問文を形成する際、定形動詞が主語名詞句の前に置かれるが、その際動詞だけがその位置に置かれ、(66b) のように動詞と裸名詞が共に文頭に位置することはない。従って、動詞と裸名詞が語を成していないのは明らかである。一方で、*did house-buying* という訳からも分かるように、(65b) は慣習化された活動を表し、また裸名詞は非特定のである。また、文法数に関してもニュートラルである。次の文を見てみよう。

- (67) a. Peter **köpte** ett **hus**. Ett i Stockholm och ett i Göteborg.
 P. buy.PAST a house one in Stockholm and one in Göteborg
 ‘Peter bought a house. One in Stockholm and one in Göteborg.’
- b. Peter **köpte** **hus**. Ett i Stockholm och ett i Göteborg.
 P. buy.PAST house one in Stockholm and one in Göteborg

(67a) からも分かるように，通常の動詞と名詞句の組み合わせを含む文では，*Ett i Stockholm och ett i Göteborg* ‘one in Stockholm and one in Göteborg.’ という句を続けることができないが，(67b) では同じ句を続けることができる．これは裸名詞が文法数的にニュートラルであることのために可能になっているものと思われる．

以上，スウェーデン語の動詞と裸名詞の組み合わせは，(62) の特徴を備えていて，かつ語彙的な抱合は起こしていないことから，非語彙的抱合の一種であるということが出来る．2.5.2 で見たように動詞と裸名詞の組み合わせも不変化詞動詞と認められるとすると，スウェーデン語の不変化詞動詞は非語彙的抱合を起こしているということが出来る．

4.4.3 語彙的抱合と不変化詞動詞

スウェーデン語の不変化詞動詞が非語彙的抱合を起こしている証拠として，別の現象を見てみよう．この節では，語彙的抱合を起こしたと見なすことができる複合動詞と不変化詞動詞の関係を観察し，不変化詞が動詞に対して非語彙的抱合を起こしているということを明らかにしたい．

まずは語彙的抱合と見なすことができる複合動詞の例を見てみよう．

- (68) a. Peter **högg** Anna med kniv
 P. cut.PAST A. with knife
 ‘Peter cut Anna with a knife.’
- b. Peter **kniv-högg** Anna.
 P. knife-cut.PAST A.
 ‘Peter cut Anna with a knife.’

(68a) は動詞と前置詞句 *med kniv* ‘with knife’ を含む通常の文である．一方，(68b) では名詞 *kniv* ‘knife’ が動詞と複合し複合動詞を成している．次の (69a) から分かるように，

疑問文形成の際に，名詞と動詞が共に主語名詞句の前に位置し，(69b)のように動詞部分だけが主語名詞句の前に位置することはできないことから，一語を成していると言うことができる．

- (69) a. **Kniv-högg** Peter Anna?
 knife-cut.PAST P. A.
 ‘Did Peter cut Anna with a knife?’
- b.* **Högg** Peter **kniv** Anna?
 cut.PAST P. knife A.

以上のように，このような複合動詞は語彙的抱合の一種と見なすことができる．この節では主に名詞と動詞からなる複合動詞と不変化詞動詞の関係を探求することで，不変化詞動詞が非語彙的抱合の産物であることを明らかにする．

さて，名詞と動詞からなる複合動詞は英語やドイツ語などのゲルマン系言語では，生産的な語形成のパターンではない．同じ系統に属するスウェーデン語も名詞と動詞からなる複合動詞は非常に限られた数しかなかったが，1900年代に入ってこのような語形成がかなり自由に作られるようになってきたと言われている（Åkermalm (1957)）．

このような名詞と動詞からなる複合動詞では，付加詞である名詞が動詞に対して抱合したものが大半である．Josefsson (1998: 79)によるとそのような複合動詞は次のように分類できるという．

- (70) a. Vi jul+handlar alltid på Tempo. (Time)
 we Christmas+shop always on Tempo
- b. Vi fjäll+vandrade i somras. (Location)
 we mountain+hiked this summer
- c. Studenterna foto+kopierade avhandlingen. (Instrument)
 students-the photo+copied thesis-the
- d. Familien fot+vandrade i Sarek. (Means)
 family-the foot+walked in Sarek
- e. Stenström panik+sålde sitt hus. (Circumstance)
 Stenström panic-sold his house
- f. Olsson rekord+sprang sträckan på tre minuter. (Degree)
 Olsson record+ran distance-the on three minutes

これらの付加詞が抱合した複合動詞は不変化詞動詞との分布に関して、面白い現象が見られる。次の例を見てみよう。

- (71) a.*Peter **kniv-högg ihjäl** Anna
 P. knife-cut.PAST to.death Anna
 ‘Peter cut Anna to death.’
- b.*Stenström **panik-sålde bort** sitt hus.
 Stenström panic-sell.PAST away his house
 ‘Stenström sold his house in a panic.’
- c.*Han **snabb-städade rent** sitt rum.
 he quick-clean.PAST clean his room
 ‘He tidied up his room’

上の例からも分かるように、付加詞を抱合した複合動詞は不変化詞と共起しない。例えば、(71a) では、複合動詞 *kniv-högg* ‘knife-cut’ と不変化詞 *ihjäl* ‘to death’ が用いられているが、非文となっている。これらの文法性は、何らかの意味的な理由によるものではない。次の例を見てみよう。

- (72) Peter **kniv-högg** Anna **till döds**.
 P. knife-cut A. to death

上記の例では、複合動詞 *kniv-högg* が不変化詞 *ihjäl* と同義の前置詞句 *till döds* ‘to death’ と共に用いられているが、文法的な文となっている。したがって、(71a) は複合動詞が何らかの意味的な理由により結果述語と共起できず非文になっているわけではないと考えられる^{*4}。以上見てきたように、項を抱合した複合動詞は不変化詞とは共起しない。

スウェーデン語の複合動詞の多くは付加詞に相当する名詞が抱合されたものであるが、項に相当するものが抱合されたものも、若干存在する。興味深いのは、項が抱合された複合動詞は不変化詞と共起するという点である。次の例を見てみよう。

^{*4} 付加詞を抱合した複合動詞と不変化詞が共起しないというのは、コーパスからも明らかになった。Tohno (2004) では、不変化詞 *ihjäl* と前置詞句 *till döds* に関してコーパスによる調査を行った。不変化詞 *ihjäl* と共起した複合動詞は一件も見つからなかった。一方、前置詞句 *till döds* は、*kniv-hugga* ‘knife-cut’, *kniv-skära* ‘knife-cut’, *miss-handla* ‘ill-treat’, *el-chocka* ‘electro-shock’, *van-vårda* ‘ill-take.care.of’ などの複合動詞と共起した例が見つかった。

- (73) a. Peter **damm**-sög **bort** brödsmulor.
 P. dust-vacuumed away bread.crumbs
 ‘Peter vacuumed out breadcrumbs.’
- b. De **lag**-stiftade **fram** en förkortning av arbetstiden.
 they law-made forward a reduction in working hours
 ‘They promote a reduction of working hours by law.’

(73a) では *damm-suga* ‘dust-vacuum’ という複合動詞が，(73b) では *lag-stifta* ‘law-make’ という複合動詞が用いられている。どちらも，抱合している名詞は動詞に対して項の関係にあり，不変化詞と共起することができる。

以上，この節では付加詞が抱合された複合動詞が不変化詞と共起でできるのに対して，項を抱合した複合動詞は不変化詞と共に用いることができないということを見た。

次の節では，不変化詞が動詞に対して非語彙的抱合を起こしていると考えると，このような複合動詞と不変化詞の共起関係をうまく説明できることを明らかにしたい。

4.4.4 語彙的・非語彙的抱合の意味構造

この節では，前節で見た不変化詞動詞と複合動詞の関係を意味構造で説明することを試みる。ところで LFG で仮定されている各構造のうち，構成素構造と意味構造の二つ構造から，語彙的抱合，非語彙的抱合を捉えるとどうなるだろうか？ここでは次のように捉えることができるものと仮定する。語彙的抱合とは構成素構造においても，意味構造においても，抱合される要素と動詞は一つの語である。一方，非語彙的抱合は構成素構造においては，抱合される要素と動詞は別々の語であるが，意味構造においては一つの語であると定義する。以上をまとめると次の表のようになる。

	語彙的抱合	非語彙的抱合
構成素構造	1 語	2 語
意味構造	1 語	1 語

表 4.2 語彙的・非語彙的抱合と構成素構造・意味構造における語彙性

上の表にあるように，抱合される要素と動詞は，語彙的抱合でも非語彙的抱合でも，意

味構造においては1語であると仮定する。

さて、前節では項が抱合される場合と付加詞が抱合される場合があると述べたが、これも語彙的抱合と非語彙的抱合との観点から整理しておこう。

	語彙的抱合	非語彙的抱合
項の抱合	<i>damm-suga</i> (dust-vacuum)	<i>köra bil</i> (drive car)
付加詞の抱合	<i>kniv-hugga</i> (knife-cut)	<i>sparka bort</i> (kick away)

表 4.3 語彙的・非語彙的抱合と項・付加詞の抱合

語彙的抱合に関しては前節で述べたように、*kniv-hugga* ‘knife-cut’ のような付加詞を抱合したものがほとんどであるが、*damm-suga* ‘dust-vacuum’ のような項を抱合したものも存在する。一方、*köra bil* ‘drive car’ のような動詞と裸名詞の抱合は、動詞の項が抱合したものと考えられる。さてこの節では、*sparka bort* ‘kick away’ のような不変化詞動詞が付加詞の非語彙的抱合であると仮定すると、前節の問題を解決することができるということを明らかにする。

第1章でも述べたように、本稿では概念構造 (Conceptual Structure) を採用する。ここでは抱合をいかに概念構造で捉えるかことができるかに注意しながら見ていこう。

項の抱合

項の抱合は動詞語幹の概念構造の変項部分を、項の概念構造で埋め、意味構造における一つの述語を作ることと考える。

例えば、*köra bil* ‘drive car’ において、*köra* ‘drive’ の意味は (74a) のように記述することができるだろう。ACT-ON の第2項は乗り物でなければならないという選択制限がある。*köra bil* の意味はその部分を *köra* の概念構造の第2項の部分を *bil* ‘car’ の概念構造で埋めたものとなる (= (74b))。

(74) a. *köra* ‘drive’ :

$$\left[\begin{array}{l} \text{ACT-ON} ([x], [\text{VEHICLE}]) \\ [\text{MEANS} ([\text{USE} ([x], [\text{VEHICLE}])]) \end{array} \right]$$

b. *köra bil* ‘drive car’ :

$$\left[\begin{array}{l} \text{ACT-ON} ([x], [\text{CAR}]) \\ [\text{MEANS} ([\text{USE} ([x], [\text{CAR}])]) \end{array} \right]$$

さて、語彙的抱合の場合も同様である。*damm-suga* ‘dust-vacuum’ において、動詞語幹 *suga* ‘vacuum’ の意味は (75a) のように記述することができるだろう。一方、*damm-suga* の意味は ACT-ON の第2項を *damm* ‘dust’ の概念構造で埋めた (75b) になる。

(75) a. *suga* ‘vacuum’:

$$\left[\begin{array}{l} \text{ACT-ON} ([x], [y]) \\ [\text{RESULT} ([\text{GO}([y], [\text{TO} ([\text{IN}([x])])])]) \end{array} \right]$$

b. *damm-suga* ‘dust-vacuum’:

$$\left[\begin{array}{l} \text{ACT-ON} ([x], [\text{DUST}]) \\ [\text{RESULT} ([\text{GO}([\text{DUST}], [\text{TO} ([\text{IN}([x])])])]) \end{array} \right]$$

付加詞の抱合

次に付加詞の抱合の意味構造を考えよう。付加詞の抱合とは、意味構造において付加詞を付け加えるか、動詞語幹が持つ付加詞部分の変更を埋めることであると仮定しよう。

まずは、語彙的抱合である *kniv-hugga* ‘knife-cut’ から考えてみよう。*hugga* ‘cut’ は (76a) にあるように結果と手段の二つの意味的付加詞を持つと考えられる。*kniv-hugga* ‘knife-cut’ の意味はその意味的付加詞のうち手段の中の項を埋めることであると考えられる。

(76) a. *hugga* ‘cut’:

$$\left[\begin{array}{l} \text{ACT-ON} ([x], [y]) \\ [\text{RESULT} ([\text{GO}([y], [\text{TO}([\text{INJURED}]])])]) \\ [\text{MEANS} ([\text{USE}([x], [\text{CUTLERY}])])]) \end{array} \right]$$

b. *kniv-hugga* ‘knife-cut’:

$$\left[\begin{array}{l} \text{ACT-ON} ([x], [y]) \\ [\text{RESULT} ([\text{GO}([y], [\text{TO}([\text{INJURED}]])])]) \\ [\text{MEANS} ([\text{USE}([x], [\text{KNIFE}])])]) \end{array} \right]$$

次に *sparka bort* ‘kick away’ を非語彙的抱合の結果であると仮定して意味構造を考えよう。 *sparka* ‘kick’ の意味構造は (77a) のように記述することができるだろう。ここでは仮に、働きかけの主事象と手段を表す意味的付加詞からなるものと考え^{*5}。それに対して、 *sparka bort* ‘kick away’ の意味は (77b) にあるように、 *bort* ‘away’ が結果を表す意味的付加詞を加えたと考えることができる。

(77) a. *sparka* ‘kick’:

$$\left[\begin{array}{l} \text{ACT-ON} ([x], [y]) \\ [\text{MEANS} ([\text{USE}([x], [\text{FOOT}])])]) \end{array} \right]$$

b. *sparka bort* ‘kick away’:

$$\left[\begin{array}{l} \text{ACT-ON} ([x], [y]) \\ [\text{MEANS} ([\text{USE}([x], [\text{FOOT}])])]) \\ [\text{RESULT} ([\text{GO}([y], [\text{TO}([\text{FAR AWAY}]])])])]) \end{array} \right]$$

*5 ここでは「壁を蹴る」のように物体の移動を伴わない意味の *sparka* ‘kick’ の意味を仮定している。

項・付加詞の抱合の回数

このような意味構造における抱合が無制限に起こるとは考えにくい。ここでは仮に、項の抱合も付加詞の抱合もそれぞれ一回ずつしか起こらないと考えよう。ただし、項の抱合と付加詞の抱合は別物であるからそれらが同時に起こる可能性はあると考える。次の節では以上を踏まえた上で、複合動詞と不変化詞の共起関係の問題を考えてみよう。

4.4.5 複合動詞と不変化詞の共起関係

まずは、付加詞を抱合した複合動詞と不変化詞が共起できない理由を考えよう。(78a)からもわかるように、付加詞を抱合した複合動詞と不変化詞は共起しない。もちろん、(78b)のように複合動詞のみ、あるいは(78c)のように不変化詞動詞のみの場合は全く問題はない。

- (78) a. *Peter **kniv-högg** **ihjäl** Anna
 P. knife-cut.PAST to.death Anna
 ‘Peter cut Anna to death with a knife.’
- b. Peter **kniv-högg** Anna
 P. knife-cut.PAST Anna
 ‘Peter cut Anna with a knife.’
- c. Peter **högg** **ihjäl** Anna
 P. cut.PAST to.death Anna
 ‘Peter cut Anna.’

そこで、*hugga* ‘cut’ に *kniv* ‘knife’ と *ihjäl* ‘to death’ の両方を付加した意味構造を考えてみよう。

- (79) *kniv-hugga ihjäl* ‘knife-cut to.death’

<p>ACT-ON ([x], [y])</p> <p>[RESULT ([GO([y],[TO([INJURED])])])]</p> <p>[MEANS ([USE([x], [<u>KNIFE</u>]))]</p> <p>[<u>RESULT ([GO([y],[TO([DEAD])])])]</u></p>
--

上記の下線部にあるように, *kniv* ‘knife’ は *hugga* ‘cut’ の手段を表す付加詞内の項を埋めている。一方, *ihjäl* ‘to death’ は動詞 *hugga* に結果の付加詞を加えていることになる。付加詞の抱合が一回のみ有効であると考えれば, ここでは付加詞の抱合が2度起こっているのが非文になると説明することができる。

次に, 項を抱合した付加詞と不変化詞がなぜ共起可能なのかを, 次の例文で考えてみたい。

- (80) Peter **damm-sög** **bort** brödsmlur.
 P. dust-vacuum.PAST away bread.crumbs
 ‘Peter vacuumed out breadcrumbs.’

suga ‘vacuum’ に *damm* ‘dust’ と *bort* ‘away’ の両方を加えた意味構造を考えてみよう。

- (81) *damm-suga bort* ‘dust-vacuum away’:

$$\left[\begin{array}{l} \text{ACT-ON} ([x], [\underline{\text{DUST}}]) \\ \text{[RESULT ([GO([DUST], [TO ([IN([x])])])]} \\ \text{[RESULT ([GO([DUST], [TO (EXTINCT)])]} \end{array} \right]$$

すでに見たように, *damm-suga* ‘dust-vacuum’ において, *damm* は動詞に対して項の抱合を起こしていて, 動詞の意味構造の主事象の第2項を埋めている。一方, 不変化詞が付加詞の抱合であると考えると, 意味構造中の最終行の意味を付加していることになる。これは項の抱合と付加詞の抱合という異なる種類の抱合が起こっているために, 可能であると考えることができる。

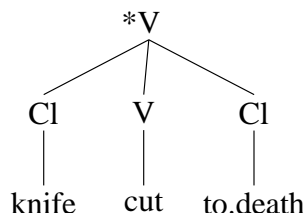
ここまで見てきたように, 複合動詞と不変化詞の共起関係は, 意味構造レベルでの抱合という考え方でうまく説明することができる。しかし, この現象に対する説明は他のレベルではできないだろうか? 次節では統語レベルでの一般化が可能かどうか考える。

4.4.6 Abstract Clitic Hypothesis による説明

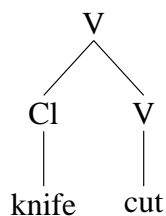
複合動詞と不変化詞の共起関係に対する、意味構造以外のレベルで説明の最も有力な代案は Keyser and Roeper (1992) による ‘Abstract Clitic Hypothesis’ であろう。この仮説は、全ての英語の動詞には invisible な接語 (clitic) の位置が動詞の前後にあり、接辞 *re-* や不変化詞 *out* はその接語の位置に生起するというものである。ただし、接語の位置は一つの動詞につき一つであるため、例えば、**regive up* は非文法的となると彼らは説明する。

これをスウェーデン語の複合動詞と不変化詞の共起関係にも応用できるか考えたい。スウェーデン語にも接語の位置が動詞の前後にあり、抱合される要素がその位置を占めると考えると、付加詞を抱合した複合動詞と付加詞の抱合である不変化詞が共起しない理由は、(82a) にあるように接語の位置を二つ用いているためだと説明することができる。一方、(82b) や (82c) は接語の位置をひとつしか用いていないために問題ないと言うことができる。

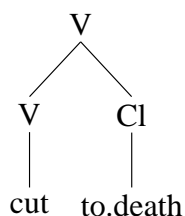
(82) a. *kniv-hugga ihjäl* ‘knife-cut to.death’



b. *kniv-hugga* ‘knife-cut’

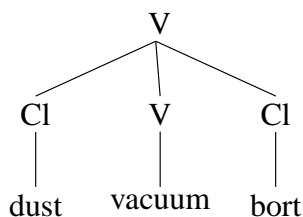


c. *hugga ihjäl* ‘cut to.death’



しかし、この仮説ではなぜ項を抱合した複合動詞と不変化詞が共起できるのかは説明することができない。

(83) *damm-suga bort* ‘dust-vacuum away’



これを説明するためには、項と付加詞で別々の接語の位置が存在するという仮定が必要となり、あまり説明力のある仮説とはいえなくなる。

したがって、統語構造による説明よりは、前節で試みた意味構造による説明のほうが妥当であると思われる。

4.5 非語彙的抱合の説明の検討

ここまでで、不変化詞が動詞に対して、非語彙的抱合を起こしているということを明らかにしてきた。非語彙的抱合を起こしていると見ることにより、不変化詞動詞に見られる特徴のひとつを説明することができる。すでに見てきたように、スウェーデン語の不変化詞は投射しない、つまり指定部や補部を取らない。Toivonen は語が投射するか否かは語毎に指定されていると主張する。一方、不変化詞が動詞に対して意味構造で抱合を起こしているとする、不変化詞に投射がないというのは、抱合の産物であると説明することが

できる．というのも，一般に，抱合されるのは語以下の単位で，語より大きな句は基本的に抱合されないからである (Baker (1988) など参照．) *6 ．

しかし，不変化詞が動詞に対して非語彙的抱合を起こしていると考えると，一見説明できないような現象も存在する．不変化詞の等位接続の現象である．次の例文を見てみよう．

- (84) a. Han **klädde på och av** sig.
 he dress.PAST on and off himself
 ‘He put on and take off clothes.’
- b. Han **bär in och ut** alla grejer.
 he carry.PPES in and out all thing.Pl
 ‘He carries in and out all the stuff.’

上記の例からも分かるように，スウェーデン語の不変化詞は等位接続することができる．これは，不変化詞が句を成していることになり，不変化詞が動詞に対して抱合を起こしているという主張に反するように見える．

しかし，どのような不変化詞でも等位接続されるというわけではない．まず，*på och av* ‘on and off’, *in och ut* ‘in and out’ のように反義となる不変化詞動詞の組み合わせでなくてはならない．したがって，*in och upp* ‘in and up’ のような反義を成さない不変化詞が等位接続された場合は非文となる．

- (85)*Han **bär in och upp** alla grejer.
 he carry.PPES in and upp all thing.Pl

また，反義関係にある不変化詞が等位接続された場合，それを含む文の行為が反復されたという解釈が得られる．したがって，たとえ反義関係をなすような不変化詞が等位接続されたとしても，反復の解釈が得られないような場合，不変化詞が現れる位置には現れない．次の例を見てみよう．

*6 ただし，ニウエ語のように抱合された名詞を形容詞や関係節が修飾する言語も存在する (Massam 2001) ．

- (86) Han slog (***sönder och samman**) honom (**sönder och samman**)
 he beat.PAST to.pieces and together him to.pieces and together
 ‘He beat him to a pulp.’

等位接続されている *sönder* ‘to.pieces’ と *samman* ‘together’ は共に不変化詞であり，ほぼ反義関係にある．しかし，不変化詞が現れる位置（目的語名詞句より前の位置）には現れない．これはこの等位接続された不変化詞が殴られた結果状態を表し，反復の解釈ができないために，不変化詞の位置に現れないものと考えられる．以上見てきたように，等位接続される不変化詞は，どのようなものでも良いわけではなく，反義関係にあり，かつ，反復の解釈を許容するものでなければならない．

一般に複合語の中に句が包摂されることはない (Roeper and Siegel (1978)) と言われるが，次の例のように，複合語の中に反義関係にある語が等位接続された形で現れることがある．

- (87) a. **in- och utvandrare**
 in- and out.rambler
 ‘immigrant and emigrant’
- b. solens **upp- och nedgång**
 sun.DEF.GEN up- and down.time
 ‘sunrise and sunset’

これらの現象と不変化詞動詞で見た現象は，どちらも反義関係にある語が等位接続された場合であるという平行性が見られる．反義関係にある等位接続された語が複合語に包摂され一語をなすということは，非語彙的な抱合においてもそのような現象が起きうることを示している．したがって，この節で見てきた現象は，不変化詞が非語彙的抱合を起こしているという主張の反例とはならない．

第5章 項構造

5.1 はじめに

前章では意味構造において不変化詞が動詞に対して抱合を起こしている、つまり非語彙的抱合を起こしているという主張を展開した。この章では、意味構造と密接に関連する項構造について考察し、スウェーデン語の不変化詞動詞において、項がどのように決定しているか考察する。特にドイツ語の不変化詞動詞に関して、「不変化詞動詞においては、内項は常に不変化詞によって導入され、動詞の内項は統語的に実現しない」という McIntyre (2001, 2003), Zeller (2001a) の仮説を同じゲルマン系言語に属するスウェーデン語で検証する。それを受けて、項構造がレキシコンで決定するとする伝統的な語彙主義に基づき、不変化詞動詞が項構造においても1語であることを主張する。

5.2 不変化詞の意味構造

意味構造から項構造へのマッピングを考えるには、意味構造がどのようになっているかを見る必要がある。前章で不変化詞動詞の意味構造を見たが、本章では不変化詞自体の意味を詳しく考察し、意味構造と項構造のマッピングを考える。以下では、不変化詞の意味を考える上で注意すべき2点に焦点を当てる。

5.2.1 イベント性としての不変化詞の意味構造

不変化詞の概念構造に対しては二つのタイプの概念構造を設定することが可能である。不変化詞 *upp* ‘up’ を例に見てみよう。

- (88) a. [_{PATH} TOWARD ([ABOVE])]
 b. [_{EVENT} GO ([*x*], [_{PATH} TOWARD ([ABOVE])])]

一つは (88a) のように不変化詞の意味に経路概念のみを認めるというもので Jackendoff (1983) が英語の不変化詞に関して設定しているものである。一方、(88b) のように不変化詞をイベントと捉える立場もあり、ドイツ語の不変化詞に関して Zeller (2001a) が採用している分析である。本稿では、後者の立場を取る。不変化詞にイベント性が認められるかどうかは本稿の範囲を超える問題であり、ここでは論じる余裕がない。ただ、意味構造と項構造のマッピングという観点から考えると、後者を採用せざるを得ない。というのも、後ほど詳しく見るが、動詞が下位範疇化しない項が不変化詞動詞の項として現れる場合があり、それらは意味的に不変化詞の項と考えることができる。前者を採用した場合、不変化詞の概念構造の中に変項がなく、不変化詞の意味的な項が不変化詞動詞の項として現れることはない。一方、後者の意味構造だと、変項 x が意味構造が概念構造内にあり、これが不変化詞動詞の項として実現すると捉えることができる。

5.2.2 品詞による意味構造の違い

次の問題点は品詞による意味構造の違いである。次の節で詳しく見ていくが、前置詞としての用法を持つ不変化詞を含む不変化詞動詞は項の実現に対して、かなり複雑な様相を呈する。一方、副詞あるいは形容詞として用法を持つ不変化詞を含む不変化詞動詞の項構造は単純である。これは、両者の意味構造の違いに起因すると考えられる。前置詞としての用法を持つ不変化詞が意味構造において図 (Figure) と地 (Ground) に相当する二つの変項を持っているのに対して、副詞や形容詞として用法を持つ不変化詞は図 (Figure) に相当する変項しか持たないと仮定すると無理なく説明することができると考えられる。本稿で仮定する前置詞としての用法を持つ不変化詞と副詞としての用法を持つ不変化詞の概念構造は以下の通りである。

(89) 前置詞としての用法を持つ不変化詞の意味構造

av 'off': [GO ([x (Figure)], [FROM ([ON ([y (Ground)])]))]]

(90) 副詞としての用法を持つ不変化詞の意味構造

upp 'up': [GO ([x (Figure)], [TOWARD ([ABOVE])]]]

上記の意味構造に関しては次の点を注意したい。両者の意味構造は GO 関数の第 1 項 x (Figure) が空であるという点で共通しているが、前置詞としての用法を持つ不変化詞がもう 1 つ open argument である y (Ground) を持っているのに対して、副詞や形容詞としての用法を持つ不変化詞にはないという点で異なる。また、前置詞句に由来する不変化詞と形容詞の用法を持つ不変化詞は、1 つしか open argument (Figure) を持たないという点で副詞としての用法を持つ不変化詞と共通すると考えられる。

以上を踏まえた上で、スウェーデン語の不変化詞動詞の項構造を見ていこう。

5.3 不変化詞動詞と項構造

これまで不変化詞動詞における項構造は一般的に次の二つの場合があると考えられてきた。(Stiebels and Wunderlich (1994) など参照。)

- 不変化詞動詞が動詞の項を継承する場合。
- 不変化詞動詞に動詞が下位範疇化しない項が現れる場合。

次の例文を見てみよう。

- (91) a. Peter **satte** *(**ner**) den tunga väskan.
 P. put.PAST down the heavy bag.DEF
 ‘ Peter put down the heavy bag ’
- b. Peter **kastade** (**ner**) bollen från balkongen.
 P. throw.PAST down ball.DEF from balcony.DEF
 ‘ Peter threw the ball down from the balcony. ’

(91) は動詞の項を継承していると考えられる例である。(91a) では不変化詞は斜格語であり、一方、(91b) では不変化詞が付加詞として機能している。どちらにおいても、動詞の項構造は変更されていない。一方、次の (92) は動詞が選択しない項が目的語として現れている。

(92) Peter **tryckte** *(**ner**) hissen.

P. press.PAST down elevator.DEF

‘ Peter pressed the button in order for the elevator to go down. ’

以上のように，不変化詞動詞では動詞の項を継承する場合としない場合の二つがあると考えられてきたが，McIntyre (2001, 2003), Zeller (2001a) は不変化詞動詞の内項は常に不変化詞によって導入されるとする仮説を出している。

(93) Internal arguments of a particle verb are always introduced by the particle. [...] The base verb no longer links any of its internal arguments to syntax. [Zeller (2001a: 459)]

以下ではまず 5.3.1 で，内項が不変化詞によって導入されると考えると説明することができる現象，つまり，動詞によって下位範疇化されていない項が現れる現象を見ることで，上記の仮説の有効性を確認する。またその中で，不変化詞の意味構造をイベントと捉えること，そして，品詞により意味構造が異なるとする仮定の正しさも明らかになる。さらに 5.3.1 では，上記の仮説に取って問題となる (91) のような例，特に不変化詞が斜格語であると言われている (91a) のような例に関して，スウェーデン語から上記の仮説を支持する現象を提示する。

5.3.1 動詞によって下位範疇化されていない項

以下では，まず動詞によって下位範疇化されていない項が現れる場合を，自動詞文・他動詞文，二重目的語文の順に見ていくことにする。

5.3.1.1 「擬似主語」構文

英語の結果構文 (resultative construction) において，動詞が下位範疇化しない項が目的語（いわゆる，擬似目的語 (fake object)）として現れることはよく知られており，これまで様々な分析が行われてきた (Simpson (1983), Carrier and Randall (1992), Goldberg (1995), Levin and Rappaport Hovav (1996), 影山 (1996), Washio (1997), Goldberg and Jackendoff (2004) など)。また，擬似目的語を含む結果構文がゲルマン諸語に広く見られ

る現象であることも先行研究から明らかになっている (Kaufmann and Wunderlich (1998), Lødrup (2000) など)。北ゲルマン語に属するスウェーデン語も例外ではなく、結果構文において擬似目的語が現れる。下記の例ではそれぞれ再帰代名詞 *sig* と *sin son* ‘her son’ が動詞によって選択されていない項である。

- (94) a. Han skrek sig *(hes).
 he shout.PAST himself hoarse
 ‘He shouted himself hoarse.’
- b. Hon sjöng sin son*(till sömns).
 she sing.PAST her son to sleep
 ‘She sang her son to sleep.’

ところが、スウェーデン語には擬似目的語が現れる構文以外に、動詞が選択しない項が主語として現れる構文が存在する。次の例を見てみよう。

- (95) a. Snön **regnade***(**bort**).
 snow.DEF rain.PAST away
 ‘The snow disappeared because of the rain.’
- b. Marken **växte** *(**igen**) med buskar
 ground.DEF grow.PAST covered with bush.PL
 ‘The ground was covered with bush since it grew up.’
- c. Badkaret **rann** *(**över**).
 bathtub.DEF flow.PAST over
 ‘The bathtub overflowed.’

上記の (95) の主語名詞句は、動詞の直後にある *bort* ‘away’, *igen* ‘covered’, *över* ‘over’ がない場合に非文になることから、動詞によって下位範疇化された項ではないことが分かる。これらの主語名詞句は不変化詞の表す状態や位置の変化の主体であると見なすことができるので、不変化詞のなんらかの意味的な項であると考えられる。本稿では、このような、動詞が下位範疇化しない主語を擬似主語 (fake subject)、また擬似主語を含む文を擬似主語構文 (fake subject construction) と呼ぶことにする。^{*1}

^{*1} McIntyre (2004:544) によると、同様の構文はドイツ語にも存在する。

擬似主語が現れるのは非動作主的な自動詞の一部を主動詞とする自動詞構文に限られ、動作主的な自動詞や他動詞の主語位置に動詞が選択しない項が現れることはない。動詞ごとにその特徴を見て行こう。

天候動詞

まず例文 (95a) でも見た *regna* ‘rain’ や *snöa*, ‘snow’, *blåsa* ‘blow’ などの天候動詞 (weather verb) が挙げられる。これらの動詞は、通常、英語などの天候動詞と同様に虚辞 *det* ‘it’ を主語として取る。

- (96) Det { *snöade* / *regnade* / *blåste* } igår.
 it { snow.PAST / rain.PAST / blow.PAST } yesterday
 ‘It { snowed/rained/blew } yesterday.’

上の例からも分かるように天候動詞はもともと項を取らない。したがって、次の (97) に挙げられた文で主語として現れている項は、不変化詞の意味的な項にあたるものと考えられる。

- (97) a. *Vägarna snöade igen* under natten.
 road.PL.DEF snow.PAST closed under night.DEF
 ‘The roads were closed during the night because of the snow.’

- a. Das Fenster wächst zu. [* das Fenster wächst zu]
 the window grows to/obscured

‘The window is becoming overgrown.’

(McIntyre 2004:544)

- b. Die Wanne fließt schlecht ab. [* die Wanne fließt]
 the bathtub flows badly away

‘The bathtub empties badly.’

(*ibid.*)

英語にも次の (c) のような文が存在するが、これは擬似主語構文ではない。というのも、これには対応する他動詞文 (= (d)) が存在し、(c) の自動詞文の主語 *the candle* が (d) の他動詞文の目的語に対応することから、(c) は (d) が反使役化を起こしたものだと考えられる。先に挙げたスウェーデン語の文は、対応する他動詞文は存在しないことから、反使役化によってできたものではない。

- c. The candle blew *(out).

- d. The wind blew out the candle.

- b. Tävlingen **regnade bort**.
 competition.DEF rain.PAST away
 ‘The competition was rained out.’
- c. Tegelpannor hade **blåst ner** från taket.
 roofing.tile.PL have.PAST blow.PERF.P down from roof.DEF
 ‘The roofing tiles blew down from the roof.’

主語として現れる項の意味役割には, (97a) や (97b) のように状態変化の主体が現れる場合と, (97c) のように位置変化の主体が現れる場合がある。どちらの場合も文の意味は, 動詞によって表された出来事が原因となり, 別の出来事が起こったという因果関係を表している。例えば, (97a) を例にとると, 「雪が降った」という出来事が原因となり, 「道路が通行不能になった」という出来事が起こったということが一つの節で表現されている。

‘Grow’ verb

天候動詞のように項を一つも持たない動詞ばかりでなく, (95b) の *växa* ‘grow’ や *gro* ‘grow’ のように項を取る動詞 (‘grow’ verb) も擬似主語構文に現れる。これらの動詞は通常, 成長する主体を主語として取るが, 次の (98) のように不変化詞の意味的な項を擬似主語として取ることもできる。

- (98) a. Marken **växte igen** med buskar.
 ground.DEF grow.PAST covered with bush.PL
 ‘The ground was covered with bush since it grew up.’
- b. ...allergier kan **växa bort** med åldern.
 ...allergy.PL can grow.INF away with year.PL.DEF
 ‘Allergies can disappear as they grow up.’

この場合, (98a) の *marken* ‘the ground’ のように植物などが育つ場所を主語として取る場合や, (98b) の *allergier* ‘allergies’ のように主体に付随するものを主語として取ることができる。どちらも主語の状態変化を表す。もともとの動詞の項は (98a) の *med buskar* ‘with bushes’ のように付加詞として現れうる。文の意味はこの場合も, 二つの出来事の因

果関係が表されている。例えば (98a) では、「低木が茂った」結果、「地面が覆われた」という因果関係を持つ二つの出来事が一つの節にコード化されている。

‘Flow’ verb

更に, (95c) の *rinna* ‘flow’ や *flöda* ‘flow’, *svämma* ‘spill’, *droppa* ‘drip’ のような液体の移動を表す動詞 (‘flow’ verb) も 不変化詞の意味的な項を擬似主語として取る。これらの動詞は通常, 移動する液体を表す名詞句を主語として取る。しかし (99) の例からも分かるように, 液体が流れる場所を意味する名詞句を主語として取る。文全体の意味は二つの出来事の因果関係を表し, 動詞によって表される「流れる」という出来事が原因となって, 液体が容器から溢れるという出来事を描出する。もとの動詞の項は (99a) の *av tårarna* ‘of the tears’ のように斜格語として現れたり, (99b) のように現れなかったりする。

- (99) a. Hennes ögon **svämmas över** av tårarna.
 her eye.PL spill.PRES over of tear.PL.DEF
 ‘Her eyes were brimming with tears.’
- b. Badkaret **rann över**.
 bathtub.DEF flow.PAST over
 ‘The bathtub overflowed.’

ただし, 上記の例文の主語名詞句が本当に不変化詞の意味的な項であるかどうかは注意が必要である。一般的に液体とそれが流れる場所の関係は, 内容物とその容器の関係であり, 隣接性に基づくメトニミーの関係が成り立つ。したがって, メトニミーの効果により容器で内容物を指すことが可能になっているという説明もできるかもしれない。しかし, 次の (100a) にもあるように, *över* ‘over’ を伴う場合には, 主語名詞句として容器も液体も取ることができるが, (100b) にあるように *över* がない場合には, 容器である *badkaret* ‘the bathtub’ を主語として取れない。したがって, *över* が容器を表す主語名詞句を導入していると考えられる。

- (100) a. {Badkaret / Badvattnet} rann över.
 bathtub.DEF / bath.water.DEF flow.PAST over
 「{ 浴槽/浴槽の水 } が溢れた .」
- b. {*Badkaret / Badvattnet} rann.
 bathtub.DEF / bath.water.DEF flow.PAST

それでは、容器を表す主語名詞句はどういった意味で、*över* の項であると言えるだろうか？ 一般的に、空間を表す前置詞や不変化詞の意味は 図 (figure) と地 (ground) の関係として捉えられる。(100a) の不変化詞 *över* ‘over’ について考えると、図 である「浴槽の水」が地である「浴槽」から溢れるということを表している。したがって、容器を表す主語名詞句は *över* の 地ということになる。ただし、単なる地というよりは、浴槽の水が溢れることにより、何らかの影響を受けていると見なすことができる。

以上、ここまで擬似主語構文の特徴を見てきたが、まとめると以下のようなになる。

① 非動作主的な自動詞が主動詞として現れる。② 擬似主語として現れる項は不変化詞の意味的な項である。③ 動詞の項は付加詞として現れうる。④ 動詞の表す出来事が原因となり、不変化詞の表す出来事が結果として起こるという「因果関係」を表す。

項がどのように実現するか、(95b) を例に見てみよう。

- (101) Marken växte igen med buskar. (=95b)
 ground.DEF grow.PAST covered with bush.PL

主動詞である *växa* ‘grow’ の概念構造は (102) のように記述することができる。一項動詞であることから変項を一つ持つ構造である。

- (102) [GO_{IDENT} ([x], [TOWARD_{IDENT} ([BIG])])] (*växa* ‘grow’ の概念構造)

不変化詞 *igen* ‘covered’ は、次のような変項を一つもつ概念構造を設定することができる。

- (103) [GO_{IDENT} ([y], [TO_{IDENT} ([COVERED])])] (*igen* ‘covered’ の概念構造)

(104) *växa igen* ‘grow covered’:

$$\left[\begin{array}{l} \text{GO}_{\text{IDENT}} ([x], [\text{TOWARD}_{\text{IDENT}} ([\text{BIG}])) \\ [\text{RESULT} ([\text{GO}_{\text{IDENT}} ([y], [\text{TO}_{\text{IDENT}} ([\text{COVERED}]))])]] \end{array} \right]$$

上記の意味構造では、動詞の変項 x と不変化詞の変項 y があるが、不変化詞の変項が項として実現することとなる。

以上、擬似主語構文を見てきたが、ここから明らかになるのは、不変化詞の項が不変化詞動詞の項として優先して実現するという点である。

5.3.1.2 他動詞文

次に他動詞文に現れる、動詞によって下位範疇化されていない項を見ていく。特に McIntyre (2003) が ‘landmark flexibility’ と呼ぶ現象がスウェーデン語にも見られる事を確認する。(これらの現象に関するスウェーデン語の記述としては Norén (1996) が詳しい。)

次の *tvätta* ‘wash’ という動詞を含む他動詞文を見てみよう。

(105) a. Peter *tvättade* *händerna*.

P. wash.PAST hands.DEF

‘ Peter washed his hands. ’

b.*Peter *tvättade* *smutsen*.

P. wash.PAST dirt.DEF

Lit. ‘ Peter washed the dirt. ’

上記の文では、洗う対象である *händerna* ‘the hands’ を目的語としてとることはできるが、移動物である *smutsen* ‘the dirt’ を目的語として取ることはできない。

次に前置詞としての用法を持つ不変化詞 *av* ‘off’ を含む他動詞文を見てみよう。

(106) a. Peter **tvättade av** *händerna*.

P. wash.PAST off hands.DEF

Lit. ‘ Peter washed off his hands. ’

b. Peter **tvättade av** *smutsen*.

P. wash.PAST off dirt.DEF

‘ Peter washed off the dirt. ’

この場合,(106b)からも分かるように,洗う対象である *händerna* ‘the hands’ 以外に,移動物としての *smutsen* ‘the dirt’ が目的語として現れる。これは,不変化詞によって導入されたものであると考えられる。このように,不変化詞動詞の目的語として,不変化詞の図 (figure) にあたるものと地 (ground) にあたるものが出現する現象は ‘landmark flexibility’ と呼ばれる (McIntyre 2003)。

一方,副詞としての用法を持つ不変化詞を含む不変化詞動詞ではこの ‘landmark flexibility’ が見られない。次の文を見てみよう。

- (107) a.*Peter tvättade **bort** händerna.
 P. wash.PAST away hands.DEF
 Lit. ‘ Peter washed away his hands. ’
- b. Peter tvättade **bort** smutsen.
 P. wash.PAST away dirt.DEF
 ‘ Peter washed away the dirt. ’

副詞としての用法を持つ不変化詞 *bort* ‘away’ を含む他動詞文でも,移動物としての *smutsen* ‘the dirt’ が現れる。ところが,動詞によって下位範疇化されているはずの *händerna* ‘the hands’ は現れることはできない。

これは,不変化詞動詞の内項が不変化詞によって導入され,かつ,副詞としての用法をもつ不変化詞が変項として図 (figure) にあたる一項しか持たないと考えると,説明することができる。

以上の現象をまとめよう。前置詞としての用法を持つ不変化詞は,(108a)にあるように意味構造に2つの変項を持つので,図 (figure) あるいは地 (ground) にあたるものが,目的語として実現する。(106a)では(108b)にあるように地 (ground) にあたる項が,(106b)では(108c)にあるように図 (figure) にあたる項が実現してるものと説明することができる。(下記の意味構造で [∅] は項としては実現しないが,コンテキストから明らかな項を意味する。)

- (108) a. *av* ‘off’ の意味構造

[GO ([(Figure)], [FROM ([ON ([(Ground)])]))]]

b. (106a) の意味構造の不変化詞の部分

[GO ([Ø], [FROM ([ON ([HANDS])]))]]

c. (106b) の意味構造の不変化詞の部分

[GO ([DIRT], [FROM ([ON ([Ø])])]]]

一方，副詞としての用法を持つ不変化詞は，(109a) にあるように意味構造に 1 つしか open argument を持たないので，図 (figure) にあたるものだけが目的語として実現する．

(109) a. *bort* ‘away’ の意味構造

[GO ([(Figure)], [TOWARD ([FAR AWAY])]]]

b. (107a) の意味構造の不変化詞の部分

[GO ([Ø], [TOWARD ([FAR AWAY])]]]

c. (107b) の意味構造の不変化詞の部分

[GO ([DIRT], [TOWARD ([FAR AWAY])]]]

以上から分かるのは，まず，内項が不変化詞によって導入されているという点．また，‘landmark flexibility’ という現象が見られるか否かは，不変化詞が品詞により意味構造が異なると考えるとうまく捉えることができるという点である．

5.3.1.3 二重目的語構文

不変化詞動詞が自動詞文・他動詞文に現れるケースを見てきたが，不変化詞動詞は (110) のような動詞句の構造を持った二重目的語構文にも現れうる

(110) [_{VP} V PRT NP NP]

次の例文を見てみよう．

(111) a. Peter **slängde** [_{PRT} **på**] sig en jacka.

P. throw.PAST on himself a jacket

‘ Peter slipped on a jacket. ’

- b. Peter **skickade** [_{PRT} **på**] mig en bok.
 P. send.PAST on me a book
 ‘Peter sent me a book (against my will).’

以上の構文に関しては、不変化詞とそれに続く目的語が前置詞句を成すとみなし、(112)にあるように前置詞句が動詞と目的語名詞句の間に移動したという分析もある (Svenonius 2003)。

(112) [_{VP} V [_{PP} P NP]_t NP t]

しかし、通常、前置詞句が動詞句内で直接目的語より前に現れることはなく、この場合にのみそのような移動を認めることができるかどうか疑問がある。また、通常の二重目的構文と同様に間接目的語の有生性制約が見られる。次の例文を見てみよう。

- (113) a. Hon hängde den nya medaljen [_{PP} **på** { ministern / ministerns bröst /
 she hung.PAST the new medal.DEF on minister.DEF / minister.DEF.POSS breast /
 väggen }].
 wall.DEF
 ‘She hang the new medal on [the minister / the minister’s breast / the wall]’
- b. Hon hängde [_{PRT} **på**] { ministern / * ministerns bröst / *väggen }
 she hung.PAST on minister.DEF / minister.DEF.POSS breast / wall.DEF
 den nya medaljen.
 the new medal.DEF

(113a) は前置詞句を含む文であるが、前置詞の目的語には有生性の制約は見られない。一方、(113a) は不変化詞動詞が目的語を二つ取っている文である。この文の間接目的語は *ministern* ‘the minister’ のように有生でなければならず、*ministerns bröst* ‘the minister’s breast’ のような体の一部や *väggen* ‘the wall’ のような無生物では非文になる。以上を考慮すると当該の構文は二重目的語構文の一種とみなすことが妥当であると思われる。

på ‘on’ 以外にも、前置詞としての用法を持つ様々な不変化詞がこの構文に参加する。次の例文を見てみよう。

- (114) a. Peter **slängde** [_{PRT} **till**] henne en livväst.
 P. throw.PAST to her a life.jacket
 ‘ Peter threw her a life jacket. ’
- b. Peter **slängde** [_{PRT} **i**] sig maten.
 P. throw.PAST in himself food.DEF
 ‘ Peter gobbled down his food. ’
- c. Peter **slängde** [_{PRT} **av**] sig en jacka.
 P. throw.PAST off himself a jacket
 ‘ Peter threw o his jacket. ’
- d. Peter **slängde** [_{PRT} **ur**] sig en massa dumheter.
 P. throw.PAST from himself a lot.of swear.words
 ‘ Peter blurted out a lot of swear words. ’

一方，副詞としての用法を持つ不変化詞を含む不変化詞動詞は二重目的語構文には現れない．次の例を見てみよう．

- (115) a.*Peter **slängde** [_{PRT} **upp**] hunden ett ben.
 P. throw.PAST up dog.DEF a bone
 ‘ Peter threw up a bone to the dog. ’
- b.*Peter **skickade** [_{PRT} **tillbaka**] mig en bok.
 P. send.PAST back me a book
 ‘ Peter sent back a book to me. ’

(115a) と (115b) にあるように，副詞としての用法を持つ *upp* ‘up’ や *tillbaka* ‘back’ のような不変化詞は二重目的語構文には現れない．(Teleman et al. (1999b: 421-424) など参照.)

以上のような振舞いは，品詞による意味構造の違いと内項が不変化詞によって導入されるという仮定により説明することができる．前置詞としての用法を持つ不変化詞は 2 つの open argument がある為，その両方をそれぞれ直接内項・間接内項として実現することができる．そこで，二重目的語構文が可能であると説明することができる．具体的に見てみよう．

不変化詞 *på* ‘on’ は (116a) のように、図と地を取る二項述語であると分析することができる。(111b) の意味構造の不変化詞部分は (116b) のようになり、BOOK と ME がそれぞれ直接内項・間接内項として実現することになる。

(116) a. 不変化詞 *på* ‘on’ の意味構造

[GO_{Poss} ([(Figure)], [TO ([ON ([(Ground)])]))]]

b. (111b) の意味構造の不変化詞部分

[GO_{Poss} ([BOOK], [TO ([ON ([ME])]))]]

一方、副詞としての用法を持つ不変化詞は 図のみを項として取る一項述語であると考えられる。例えば、*tillbaka* ‘back’ の意味構造は次のように 図を項として取る述語として表記することができる。

(117) *tillbaka* ‘back’ の意味構造

[GO ([(Figure)], [TOWARD ([ORIGINAL PLACE])])]

内項が不変化詞によってのみ決定されるとすると、副詞としての用法を持つ不変化詞は内項を一つしか実現させることができず、二重目的語構文を形成できないと説明することができる。

上記の分析が正しいとすると、直接目的語と間接目的語の両方が動詞によって下位範疇化されていない二重目的語構文が可能であることが予想される。実際、そのような例がコーパスなどに見られる。

(118) a. Bettina Oberesch **red** [PRT **till**] sig guldet ... (Parole corpus)

B.O. ride.PAST to herself gold.DEF

‘ Bettina Oberesch won a goldmedal in horse-riding competition. ’

b. ... han **tjatade** [PRT **till**] sig en gitarr av föräldrarna. (Parole corpus)

he nag.PAST to himself a guitar from parent.PL.DEF

‘ He nagged his parents for a guitar and got it. ’

以上から、不変化詞動詞を含む二重目的語構文においては、直接内項・間接内項の両方が不変化詞によって導入されていると分析することができる。

以上、ここまでは不変化詞が内項を導入していると考えられる例を、自動詞文・他動詞文・二重目的語文の順に見てきた。

5.3.2 動詞の項を継承しているように見える例

不変化詞が常に内項を導入するとする仮説にとって問題なのは、動詞の項を継承しているように見える不変化詞動詞である。まずは、不変化詞が付加詞であるように見える例を見てみよう。

(119) Peter **kastade** (**ner**) bollen från balkongen.
 P. throw.PAST down ball.DEF from balcony.DEF
 ‘Peter threw the ball down from the balcony.’

上記の例では、不変化詞 *ner* ‘down’ を取っても項が変わらないので、目的語名詞句は動詞の項であると言える。しかし、動詞と不変化詞の意味構造を考えると、これらの例も不変化詞が内項を導入しているとも考えることもできる。不変化詞 *ner* ‘down’ は次のような概念構造を設定できる。

(120) *ner* ‘down’: [GO ([*x* (Figure)], [TOWARD ([BELOW])])]

不変化詞 *ner* の変項 *x* が、動詞の内項と同定され、それが不変化詞動詞全体の項として実現されているとも考えることも可能である。したがって、これらの例は必ずしも、仮説に対する反例とはならない。

次に、不変化詞が授受動詞や設置動詞など3項動詞の斜格語として現れているように見える例について考えてみよう。

(121) **Ge hit** boken!
 give hither book.DEF
 ‘Give me the book.’

- (122) a. Peter **satte** *(**ner**) väskan.
 P. put.PAST down bag.DEF
 ‘ Peter put down the bag ’
- b. Peter **lade** *(**dit**) boken
 P. lay.PAST thither book.DEF
 ‘ Peter laid the book there. ’

上記の例では，不変化詞は斜格語として、つまり項としての役割を果たしていると言われることがある。そうだとすると，これも仮説に対する反例となる。果たして，そうだろうか？ 詳しく見て行こう。次の例からも分かるように，一般に設置動詞は着点ではなく場所の前置詞を用いる。

- (123) a. Peter satte väskan [på / * till] golvet.
 P. put.PAST bag.DEF [on / to] floor.DEF
 ‘ Peter put the bag on the floor. ’
- b. Peter lade boken [på / * till] bordet.
 P. lay.PAST book.the [on / to] table.DEF
 ‘ Peter laid the book on the table. ’

ところで，スウェーデン語には次の表にあるように，場所を表す副詞と方向を表す副詞のペアが存在する。

Location	Direction	Location	Direction
<i>här</i> ‘here’	<i>hit</i> ‘hither’	<i>uppe</i> ‘up’	<i>upp</i> ‘up’
<i>där</i> ‘there’	<i>dit</i> ‘thither’	<i>ner</i> ‘down’	<i>ner/ned</i> ‘down’
<i>inne</i> ‘in’	<i>in</i> ‘into’	<i>borta</i> ‘away’	<i>bort</i> ‘away’
<i>ute</i> ‘out’	<i>ut</i> ‘out’	<i>hemma</i> ‘at home’	<i>hem</i> ‘to home’

表 5.1 場所と方向の副詞のペア

上記の表のペアのうち，設置動詞で場所を表す副詞と方向を表す副詞のどちらが用いられるか見てみよう。

次の例からもわかるように，前置詞句が現れる位置では，*ner* ‘down’，*där* ‘there’ のように場所の副詞が用いられる．

- (124) a. Peter satte väskan **ner**.
 P. put bag.the down
 ‘ Peter put the bag down. ’
- b. Peter lade boken **där**.
 P. laid book.the there
 ‘ Peter laid the book there. ’

一方，不変化詞が現れる位置では，場所の副詞ではなく，*ner* ‘down’ や *dit* ‘thither’ のような方向の副詞が用いられる．

- (125) a. Peter satte **ner** väskan.
 P. put down bag.DEF
 ‘ Peter put the bag down. ’
- b. Peter lade **dit** boken.
 P. laid to.there book.DEF
 ‘ Peter laid the book there. ’

以上から，設置動詞に現れる不変化詞は単に斜格語として機能し，項構造を充足しているのではないとすることができる．先ほどの例と同じように，不変化詞の変項が，動詞の内項と同定され，それが不変化詞動詞全体の項として実現されていると考えることもできる．

5.3.1 で不変化詞が内項を導入していると考えたと説明がつくを最初見た．また，5.3.2 では，一見すると動詞の項が継承されているように見える例でも，不変化詞によって項が導入されていると考えられることを確認した．したがって，スウェーデン語の不変化詞動詞においても内項は常に不変化詞によって導入されると考えることができ，「不変化詞動詞においては，内項は常に不変化詞によって導入され，動詞の内項は統語的に実現しない」という McIntyre (2001, 2003), Zeller (2001a) の仮説が有効であると言える．

これまでの議論で見てきたように、不変化詞動詞の内項は常に不変化詞によって導入される。また、暗黙の了解として特に見ては来なかったが、外項は動詞によって導入される。つまり、不変化詞動詞の項構造の決定においては、動詞と不変化詞の双方から項が導入される。項構造がレキシコンで決定するとする従来 of 語彙主義の立場に立った場合、不変化詞動詞は項構造においても一つの語であると言える。

第6章 文法関係と句構造

この章ではスウェーデン語の不変化詞動詞の文法関係と統語構造を概観する。まず、不変化詞動詞を含んだ文は機能的に単文 (mono-clausal) であり、文法関係のレベルにおいては一語であるという主張を展開する。続けて、不変化詞動詞を含んだ文の動詞句の構造を分析する。動詞・不変化詞・目的語名詞句を含む動詞句の構造はこれまで主張されてきたような階層構造ではなく、平らな構造であると主張する。

6.1 文法関係

3.3 でも見たように、スウェーデン語の不変化詞は、一見すると様々な文法関係を担っているように見える。以下に 3.3 で見た例を再録する。

- (126) Peter **kastade** (ut) bollen. (付加語)
 P. throw.PAST out ball.DEF
 ‘Peter threw out the ball.’
- (127) Peter **lade** *(ner) brevet (på bordet). (斜格語)
 P. lay.PAST down letter.DEF on table.DEF
 ‘Peter laid down the letter (on the table).’
- (128) Peter **körde** **bil** igår. (目的語)
 P. drive.PAST car yesterday
 ‘Peter drove a car yesterday.’
- (129) Peter har **slagit** **ihjäl** henne. (XCOMP)
 P. has beat.PERFP to.death her
 ‘Eric has beaten her to death.’

- (130) Peter **tycker om** choklad. (述語の一部)
 P. think.PRES about chocolate
 ‘Peter loves chocolate.’

以上のように，スウェーデン語の不変化詞は一見すると様々な文法機能を担っているように見えるが，本稿では，動詞と不変化詞が機能構造において一語を成しているという主張を展開する．

ここで，3.5 で見た形容詞としての用法をもつ不変化詞の一致に関する議論をもう一度，繰り返そう．

スウェーデン語の形容詞は主語名詞句の性と数に一致する．これらの形容詞が結果構文の結果述語として用いられると，目的語との間で性と数に関して一致を示す．次の例を見よう．

- (131) a. Han skrev uppsatsen färdig-**ø**. (結果構文)
 he wrote paper.DEF.Non-Neuter.Sg finished-Non-Neuter.Sg
 ‘He finished writing the paper.’
 b.*Han skrev uppsatsen färdig-**t**.
 he wrote paper.DEF.Non-Neuter.Sg finished-Neuter.Sg
 c.*Han skrev uppsatsen färdig-**a**.
 he wrote paper.DEF.Non-Neuter.Sg finished-Pl

上記の例では目的語名詞句が中性単数であるため，結果述語である形容詞もそれにあわせて一致を起さなければならないことを示している．つまり，目的語名詞句は形容詞の論理的な主語であるということになる．形容詞を含むスウェーデン語の結果構文の機能構造（文法関係）は，次のような XCOMP を含む bi-clausal な構造であると考えられる．

(132)	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding-right: 10px;">PRED</td> <td>‘write <(↑SUBJ)(↑OBJ)(↑XCOMP)>’</td> </tr> <tr> <td>TENS</td> <td>PAST</td> </tr> <tr> <td>SUBJ</td> <td style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; padding: 0 10px;"> <table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding-right: 10px;">PRED</td> <td>‘Peter’</td> </tr> </table> </td> </tr> <tr> <td rowspan="4" style="vertical-align: middle; padding-right: 10px;">OBJ</td> <td style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; padding: 0 10px;"> <table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding-right: 10px;">PRED</td> <td>‘paper’</td> </tr> <tr> <td>DEF</td> <td>+</td> </tr> <tr> <td>NUM</td> <td>SG</td> </tr> <tr> <td>GEN</td> <td>Non-Neuter</td> </tr> </table> </td> </tr> <tr> <td rowspan="4" style="vertical-align: middle; padding-right: 10px;">XCOMP</td> <td style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; padding: 0 10px;"> <table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding-right: 10px;">PRED</td> <td>‘finished < ↑SUBJ >’</td> </tr> <tr> <td>NUM</td> <td>SG</td> </tr> <tr> <td>GEN</td> <td>Non-Neuter</td> </tr> <tr> <td>SUBJ</td> <td></td> </tr> </table> </td> </tr> </table>	PRED	‘write <(↑SUBJ)(↑OBJ)(↑XCOMP)>’	TENS	PAST	SUBJ	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding-right: 10px;">PRED</td> <td>‘Peter’</td> </tr> </table>	PRED	‘Peter’	OBJ	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding-right: 10px;">PRED</td> <td>‘paper’</td> </tr> <tr> <td>DEF</td> <td>+</td> </tr> <tr> <td>NUM</td> <td>SG</td> </tr> <tr> <td>GEN</td> <td>Non-Neuter</td> </tr> </table>	PRED	‘paper’	DEF	+	NUM	SG	GEN	Non-Neuter	XCOMP	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding-right: 10px;">PRED</td> <td>‘finished < ↑SUBJ >’</td> </tr> <tr> <td>NUM</td> <td>SG</td> </tr> <tr> <td>GEN</td> <td>Non-Neuter</td> </tr> <tr> <td>SUBJ</td> <td></td> </tr> </table>	PRED	‘finished < ↑SUBJ >’	NUM	SG	GEN	Non-Neuter	SUBJ	
PRED	‘write <(↑SUBJ)(↑OBJ)(↑XCOMP)>’																												
TENS	PAST																												
SUBJ	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding-right: 10px;">PRED</td> <td>‘Peter’</td> </tr> </table>	PRED	‘Peter’																										
PRED	‘Peter’																												
OBJ	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding-right: 10px;">PRED</td> <td>‘paper’</td> </tr> <tr> <td>DEF</td> <td>+</td> </tr> <tr> <td>NUM</td> <td>SG</td> </tr> <tr> <td>GEN</td> <td>Non-Neuter</td> </tr> </table>	PRED	‘paper’	DEF	+	NUM	SG	GEN	Non-Neuter																				
	PRED	‘paper’																											
	DEF	+																											
	NUM	SG																											
GEN	Non-Neuter																												
XCOMP	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding-right: 10px;">PRED</td> <td>‘finished < ↑SUBJ >’</td> </tr> <tr> <td>NUM</td> <td>SG</td> </tr> <tr> <td>GEN</td> <td>Non-Neuter</td> </tr> <tr> <td>SUBJ</td> <td></td> </tr> </table>	PRED	‘finished < ↑SUBJ >’	NUM	SG	GEN	Non-Neuter	SUBJ																					
	PRED	‘finished < ↑SUBJ >’																											
	NUM	SG																											
	GEN	Non-Neuter																											
SUBJ																													

一方，形容詞が不変化詞として用いられた場合を見てみよう．

- (133) a.*Han skrev färdig- \emptyset . uppsatsen (不変化詞構文)
 he wrote finished-**Non-Neuter.Sg** paper.DEF.**Non-Neuter.Sg**
 ‘He finished writing the paper.’
- b. Han skrev färdig-t. uppsatsen
 he wrote finished-**Neuter.Sg** paper.DEF.**Non-Neuter.Sg**
- c.*Han skrev färdig-a. uppsatsen
 he wrote finished-**Pl** paper.DEF.**Non-Neuter.Sg**

この場合，不変化詞は目的語名詞句との間に一致を見せず，デフォルトの一致（中性単数）を示す．これは目的語名詞句が不変化詞の論理的な主語ではないことを意味している．したがって，不変化詞動詞を含む文の機能構造は，XCOMP を含まない単一な構造であるということができる．

不変化詞が XCOMP ではない証拠として，不変化詞と結果述語の共起が挙げられる．

- (134) a. Hon **klädde** **av** sig naken.
 she dress.PAST off herself naked
 ‘She stripped herself naked.’
- b. Han **slog** **sönder** ett glas i bitar.
 he hit.PAST broken a glass to piece.Pl
 ‘He broke a glass to pieces.’

上記の例文においては，不変化詞 *av* ‘off’, *sönder* ‘broken’ と結果述語 *naken* ‘naked’, *i bitar* ‘to pieces’ が共起しているのが分かる．この場合，不変化詞と結果述語が同じ文法機能を担っているとすると，両方ともが XCOMP であるということになる．しかし，PRED の値として現れる文法機能 (斜格語以外の文法機能) が複数現れるということはないので (機能構造における一貫性)，不変化詞と結果述語は異なる文法機能を有していると考えられる．

しかし，不変化詞が XCOMP ではないとすると，どんな文法関係を担っているのだろうか？ 一つの可能性は付加語 (adjunct) であるというものだろう．しかし，4 章でも見たように，不変化詞が常に内項を導入していると考ええると，付加語であるという可能性はないものと思われる．意味構造で一語である不変化詞動詞が，機能構造においても一語であると考えるのが妥当であると思われる．つまり，不変化詞は機能構造において PRED の一部であるということである．そうすると以下のような機能構造をしていることになる．

- (135)
$$\left[\begin{array}{l} \text{PRED} \quad \text{'write-finished } \langle (\uparrow\text{SUBJ})(\uparrow\text{OBJ}) \rangle \text{' } \\ \text{TENS} \quad \text{PAST} \\ \text{SUBJ} \quad \left[\begin{array}{l} \text{PRED} \quad \text{'Peter'} \end{array} \right] \\ \text{OBJ} \quad \left[\begin{array}{l} \text{PRED} \quad \text{'paper'} \\ \text{DEF} \quad + \\ \text{NUM} \quad \text{SG} \\ \text{GEN} \quad \text{Non-Neuter} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

ここまでの議論で、因果関係を表す結果構文と同義の不変化詞動詞の文法関係が単一であり、動詞と不変化詞が機能構造において一つの述語をなすということを明らかにした。

それでは、それぞれ付加語 (126)、斜格語 (127)、目的語 (128) の文法関係を担っているように見える場合はどうだろうか？

まず、付加語 (126) と斜格語 (127) の例であるが、これらはそれぞれの文法関係を特定するのは困難であると思われる。しかし、これらの場合も機能構造において不変化詞と動詞が一語を成していると考えべきだと思われる。というのも、これらの例も結果構文タイプの不変化詞動詞と同じく、一種の因果関係と捉えることができるため、先ほどと同じ分析が妥当であると考えられる。

目的語のように見える (128) であるが、これも動詞と不変化詞が一語を成していると考えることができる。一般に、名詞抱合のばあい、目的語に相当する名詞を抱合すると、自動詞化するといわれている。(128) でも目的語に相当する名詞が動詞に対して、意味構造で抱合を起こした結果、主語のみを取る一項述語を形成したと考えるのが妥当であると思われる。

6.2 句構造

統語構造において、動詞と不変化詞が別々の語であることはすでに見たが、この節では、不変化詞を含んだ動詞句の句構造を考えたい。動詞、不変化詞、名詞句 (目的語) を含んだ動詞句の構造を考えた場合、次の3つの可能性が存在する。

- (136) a. [_{VP} V PRT NP]
 b. [_{VP} [V PRT] NP]
 c. [_{VP} V [PRT NP]]

(136a) は階層がない平らな動詞句 (flat VP) である。Jackendoff (2002) が英語の不変化詞動詞に関して提案しているものである。一方、(136b) は不変化詞と動詞が構成素を成しているという分析で、スウェーデン語の研究では、Josefsson (1998) や Toivonen (2003) などほとんどの研究がこの句構造を支持している。136c は不変化詞と目的語名詞句が構成

素を成しているというものであるが、この立場に立つ研究はないものと思われる。

多くの研究が (136b) の句構造を用い、不変化詞動詞を分析しているが、本稿では、動詞と不変化詞が構成素を成す証拠がないことを示し、消極的ではあるが、(136a) の平らな動詞句を採用する。

動詞と不変化詞が構成素を成すとする具体的な証拠を挙げているのは唯一 Toivonen (2003) のみであるので、彼女の研究を見ていくことにする。

Toivonen は動詞と不変化詞が構成素を成す証拠として、話題化 (**topicalization**) と等位接続 (**coordination**) を挙げている。

まず、話題化から見て行こう。

- (137) a. Hon sköt ner alla fienderna.
 she shoot.PAST down all enemies.DEF
 ‘ She shot down all the enemies. ’ (Toivonen 2003:96)
- b. %Sköt ner gjorde hon [_{VP} alla fienderna].
 shoot.PAST down did she all enemies.DEF
 ‘Shoot down she did all the enemies.’ (ibid.)
- c.*Sköt gjorde hon [_{VP} ner alla fienderna].
 shoot.PAST did she down all enemies.DEF (ibid.:96)

(137b) と (137c) の例文は、(137a) の例文から、それぞれ動詞と不変化詞 *sköt ner* ‘shot down’ と動詞のみ *sköt* ‘shot’ のみを話題化し文頭に置いたものである。動詞だけ抜き出した 137c が非文であるのに対し、不変化詞と動詞を抜き出した (137b) は人により判断が異なると言う。この二つの違いから、Toivonen は不変化詞と動詞は構成素を成すと主張している。しかし、筆者の調査では、どちらも同程度に悪いというものが多かった。これは、構成素の問題というよりは、動詞と不変化詞が意味的に一語になっているために、それが話題化のテストに影響を与えたのではないかと思われる。

次のテストは等位接続である。次の例文を見てみよう。

- (138) ... den kvinna som björnen slagit ner och dödat ... (Toivonen 2003:97)
 the woman that bear.DEF beat.PERFP down and kill.PERFP
 ‘ ... the woman that the bear had beaten down and killed... ’

上記の例文では *slagit ner* ‘beaten down’ という不変化詞動詞と *dödat* ‘killed’ という動詞が共に *den kvinna* ‘the woman’ を目的語名詞句として取っている（この場合，その名詞句は関係節の先行詞となっている）。Toivonen によれば，不変化詞と動詞が構成素を成し，それが後続の動詞と等位接続されていると主張している。

しかし，不変化詞と動詞が構成素を成して，動詞と等位接続しているかどうかは疑わしい。次の例を比べてみよう。

- (139) a. Björnen hade [_V slagit ner] och [_V dödat] kvinnan
 bear.the had beaten down and killed woman.DEF
 ‘The bear had beaten down and killed the woman.’
- b. Björnen [_I slog] [_{VP} ner] och [_I dödade] den kvinna
 bear.the beat.PAST down and kill.PAST woman.DEF
 ‘The bear beat down and killed the woman.’

(139a) では，動詞が完了分詞で非定形のため，動詞は動詞句の主要部 V に位置する。したがって，動詞と不変化詞が構成素を成している可能性がある。しかし，(139b) を見てみよう。この例文では動詞が過去形であり，定形であるため，V ではなくそれよりも高い I に位置している。一方，不変化詞は常に VP 内に留まるというのは先に見たとおりである。したがって，この場合，動詞と不変化詞は構成素を成していない。したがって，等位接続のテストで，不変化詞と動詞が構成素を成しているかどうかを決定することはできない。

以上見てきたように，話題化も等位接続も動詞と不変化詞が構成素を成しているという証拠にはなりえない。本稿では不変化詞を含む動詞句が階層を成さず，平らであるとする立場を取ることにしたい。

第7章 まとめ

この博士論文では、現代スウェーデン語の不変化詞動詞 (particle verb) の分析を行った。不変化詞動詞とはゲルマン系の言語に見られ、動詞と（前置詞や副詞としての機能も持つ）不変化詞からなる一種の複雑述語である。また、句動詞 (phrasal verb)・分離動詞 (trennenbares Verb, separable verb) などと呼ばれることもある。以下は、スウェーデン語・英語・ドイツ語の不変化詞動詞を含んだ例文である。

- (140) a. John **ringde upp** tjejen.
 J. rang up girl.the
 ‘John called up the girl.’ (スウェーデン語)
- b. John **called up** the girl. / John **called** the girl **up**. (英語)
- c. John **rief** das Mädchen **an**.
 J. rang the girl on
 ‘John called up the girl.’
- c’. ... dass John das Mädchen **an-rief**.
 that J. the girl on-rang
 ‘that John called up the girl.’ (ドイツ語)

不変化詞動詞は統語的に特殊な振舞いを見せることから、これまで理論言語学の分野において長年、考察の対象となってきた。しかし、ゲルマン系の言語の中でも英語・ドイツ語・オランダ語の不変化詞動詞に関する研究は数多くあるが、北欧語の不変化詞動詞の研究はあまり多くない。本研究の目標はスウェーデン語の不変化詞動詞の研究を通して、複雑述語の一般の問題を再考した。

以下では本論文の内容を各章毎に要約する。

第1章では本論文が扱う問題の設定とその一般言語学的意味を述べ、さらに、援用する理論的枠組みの解説を行った。現代スウェーデン語の不変化詞動詞の研究は「語とは何

か」と言う一般言語学における基本的な問題と関わってくる。というのも、不変化詞は統語的には二語であるが、意味的には一語あり、統語的なレベルと意味的なレベルにおける語の間にミスマッチが起こっている。このような表示のレベルの間のミスマッチを扱うため、本稿では語彙機能文法 (Lexical-Functional Grammar) を援用した。語彙機能文法の特徴は、言語構造の複数の表示のレベルが同時に存在し、それぞれのレベルが派生によって結び付けられるのではないという点にある。不変化詞動詞において動詞と不変化詞がどのレベルで一語を成し、どのレベルで二語なのかという問題を扱う上で、最適の理論であるということができる。

第2章では現代スウェーデン語の不変化詞動詞の基本的特徴を概観した。現代スウェーデン語の不変化詞動詞は主に次のような特徴を持っている。

- (141) a. 不変化詞は動詞句内で動詞の直後、目的語名詞句の直前に位置する。
 b. 不変化詞は指定部も補部も取らない投射のない語 (non-projecting word) である。
 c. 動詞のアクセントが落ち、不変化詞にアクセントが置かれ、動詞と不変化詞でアクセントのユニットを成す。
 d. 動詞が過去分詞形の時に、不変化詞が動詞に前接する。

第3章では先行研究の問題点を概観した。先行研究はスウェーデン語の不変化詞動詞の統一性をどのレベルで捉えるかという点で異なっている。具体的には次のような説がある。

- (142) a. 不変化詞が独立した品詞 (syntactic category) を成すという説
 b. 不変化詞が特定の文法関係 (grammatical relation) を担うとする説
 c. 不変化詞を意味の観点から規定しようとする説
 d. 不変化詞を統語的な観点から規定しようとする説

第3章では以上のそれぞれの先行研究に問題があることを指摘した。

第4章以降がこの博士論文の分析の中心となる部分である。

第4章では、不変化詞動詞の意味構造を検討し、不変化詞が動詞に対して、非語彙的抱合 (Non-Lexical Incorporation) を起こし、意味的に一語を成していることを主張した。非語彙的抱合とは、意味抱合 (Semantic Incorporation) あるいは擬似抱合 (Pseudo Incorporation) と呼ばれているものと同じである。アメリカ先住民言語などに見られる通常の抱合においては、統語構造・意味構造の両方において抱合が起こるが、一方、非語彙的抱合とは、統語構造における抱合は起きないが、意味構造において抱合が起こるというものである。複合動詞と不変化詞動詞の関係を綿密に調査することにより、スウェーデン語の不変化詞が動詞に対して非語彙的抱合を起こしているということを明らかにした。一般的に、語彙的・非語彙的を問わず、抱合する要素は X^0 レベルの語であることから、(2b) でみた不変化詞の特徴は、この非語彙的抱合の副産物であると考えられる。

第5章では不変化詞動詞の項構造を考察した。不変化詞動詞においては、外項は動詞の項が、内項は不変化詞の項が、常に不変化詞動詞全体の項として実現するということを主張した。不変化詞の項が常に内項として実現しているかどうかが大きな問題となるが、スウェーデン語の不変化詞動詞には、動詞の項が実現せず不変化詞動詞の項のみが文全体の項として実現する「擬似主語構文」が存在すること。また、不変化詞動詞を述語とする二重目的語構文では、二つの目的語が共に動詞の選択した項ではなく、不変化詞の意味的な項であると考えられることなどから、上記の一般化が正しいという結論に達した。

第6章では不変化詞動詞を含む文の文法関係と統語構造を考察した。まずは文法関係に関して分析した。従来、結果構文に意味的に類似した動詞不変化詞構文の文法関係のレベルにおいては複文 (bi-clausal) であると分析されているが、本稿では不変化詞動詞を含んだ文の文法関係は単文 (mono-clausal) であり、文法関係のレベルにおいては一語であるという主張を展開した。次に不変化詞動詞を含んだ文の統語構造、特に、その動詞句の構造を分析した。これまでの動詞・不変化詞・目的語名詞句を含む動詞句の統語構造に関してはこれまで、動詞と不変化詞が構成素を成す (1a) のような階層構造が仮定されてきたが、階層構造を仮定するような言語事実はなく、(1b) のような平らな動詞句であると主張する。

- (143) a. [[動詞 + 不変化詞] 目的語名詞句]
b. [動詞 + 不変化詞 + 目的語名詞句]

References

- Åkermalm, Åke (1957). “Om verbet atombomba och liknande bildningar i nutida sveska dagpress” *Nysvenska studier*, **32**, 8–46.
- Andersson, Erik (1977). *Verbfrasens struktur i svenskan, en studie i aspekt, tempus tidsadverbial och semantisk räckvidd*. Meddelande från Stiftelse för Åbo Akademi forskningsinstitut 18. Åbo: Åbo Akademi.
- Anward, Jan & Linell, Per (1976). “Om lexikaliserade fraser i svenskan.” *Nysvenska studier*, **55–56**, 77–119.
- Asudeh, Ash & Mikkelsen, Line (2000). “Incorporation in Danish: Implications for interfaces.” In Ronnie Cann, Claire Grover & Miller, Philip (Eds.), *Grammatical interfaces in HPSG*, pp. 1–15. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Baker, Mark C. (1988). *Incorporation : A Theory of Grammatical Function Changing*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Baker, Mark C. (1996). *The Polysynthesis Parameter*. Oxford studies in comparative syntax. New York, Oxford: Oxford University Press.
- Börjars, Kärsti & Vincent, Nigel (2004). “Position vs. function in Scandinavian presentational constructions.” In Butt, Miriam & King, Tracy Holloway (Eds.), *The Proceedings of the LFG-05*, pp. 54–72. Stanford:, CSLI Publications.
- Bresnan, Joan (Ed.) (1982a). *The Mental Representation of Grammatical Relations*. MIT Press series on cognitive theory and mental representation. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Bresnan, Joan (1982b). “The passive in lexical theory.” In Bresnan, Joan (Ed.), *The Mental Representation of Grammatical Relations*, pp. 3–86. Cambridge, Mass.: The MIT

- Press.
- Bresnan, Joan (2001). *Lexical Functional Syntax*. Blackwell Textbooks in Linguistics. Oxford: Blackwell Publishers.
- Bresnan, Joan. & Kanerva, Jonni (1989). "Locative inversion in Chicheŵa: a case study of factorization in grammar." *Linguistic Inquiry*, **20** (1), 1–50.
- Bresnan, Joan & Mchombo, Sam A. (1995). "The lexical integrity principle: evidence from Bantu" *Natural Language and Linguistic Theory*, **13** (2), 181–254.
- Bresnan, Joan. & Moshi, Lioba (1990). "Object asymmetries in comparative Bantu syntax." *Linguistic Inquiry*, **21** (2), 147–185.
- Carrier, Jill & Randall, Janet H. (1992). "Argument structure and syntactic structure of resultatives." *Linguistic Inquiry*, **23** (2).
- Dalrymple, Mary (2001). *Lexical Functional Grammar*. Syntax and Semantics 34. New York: Academic Press.
- Dalrymple, Mary, Kaplan, Ronald M., Maxwell, John T., & Zaenen, Annie (Eds.) (1995). *Formal Issues in Lexical-Functional Grammar*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Dayal, Veneeta (2003). "A semantics for pseudo-incorporation." Rutgers University ms.
- Dehé, Nicole (2002). *Particle Verbs in English: Syntax, Information Structure, and Intonation*. *Linguistik Aktuell/Linguistics Today* 59. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- Dehé, Nicole., Silke, Urban, McIntyre, Andrew, & Jackendoff, Ray (Eds.) (2002). *Explorations in Verb-Particle Constructions*. Interface Explorations 1. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Dikken, Marcel den (1995). *Particles: On the Syntax of Verb-particle, Triadic, and Causative Constructions*. Oxford Studies in Comparative Syntax. New York, Oxford: Oxford University Press.
- Ejerhed, Eva (1979). "Verb-partikel konstruktion i svenska: syntaktiska och semantiska problem." *Svenskans beskrivning* 11, pp. 49–64.

- Emonds, Joseph (1972). "Evidence that indirect object movement is a structure-preserving rule." *Foundations of Language*, **8**, 546–561.
- Farkas, Donka F. and Henriëtte De Swart (2003). *The Semantics of Incorporation*. Stanford, CA.: CSLI Publications.
- Goldberg, Adele E (1995). *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, Adele E. & Jackendoff, Ray (2004). "The English resultative as a family of constructions" *Language*, **80**, 532–568.
- Holmberg, Anders & Platzack, Christer (1995). *The Role of Inflection in Scandinavian Syntax*. Oxford studies in comparative syntax. New York, Oxford: Oxford University Press.
- Holms, Philip & Hinchliff, Ian (1993). *Swedish : A Comprehensive Grammar*. London: Routledge.
- Jackendoff, Ray S. (1973). "The base rule for prepositional phrase" In Anderson, Stephen R. & Kiparsky, Paul (Eds.), *A Festschrift for Morris Halle*, pp. 345–356. New York, Holt: Rinehart and Winston.
- Jackendoff, Ray S. (1983). *Semantics and Cognition*. Current studies in linguistics series 8. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jackendoff, Ray S. (1990). *Semantic Structures*. Current studies in linguistics series 18. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jackendoff, Ray S. (2002). "English particle constructions, the lexicon, and the autonomy of syntax" In Dehé, Nicole, Urban, Silke, McIntyre, Andrew, & Jackendoff, Ray (Eds.), *Verb-Particle Explorations*, Interface Explorations 1, pp. 21–41. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Jespersen, Otto (1924). *The Philosophy of Grammar*. London: George Allen & Unwin.
- Jørgensen, Nils & Svensson, Jan (1986). *Nusvensk grammatik*. Malmö: Liber.
- Josefsson, Gunlög (1998). *Minimal Words in a Minimal Syntax : Word Formation in Swedish*. Linguistik aktuell/Linguistics Today 19. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.

- 影山 太郎 (1996). 『動詞意味論—言語と認知の接点—』. 日英語対照研究シリーズ 5. くろしお出版.
- Kaplan, Ronald M. & Bresnan, Joan (1982). “Lexical-Functional Grammar: A formal system for grammatical representation” In Bresnan, Joan (Ed.), *The Mental Representation of Grammatical Relations*, pp. 173–281. Cambridge, Mass.: The MIT Press. Reprinted in Mary Dalrymple, Ronald M. Kaplan, John Maxwell, and Annie Zaenen, eds., *Formal Issues in Lexical-Functional Grammar*, 29–130. Stanford: CSLI Publications. 1995.
- Kaufmann, Ingrid & Wunderlich, Dieter (1998). *Cross-linguistic patterns of resultatives*. University of Düsseldorf.
- 窪園 晴夫 (1995). 『語形成と音韻構造』. 日英語対照研究シリーズ 3. 東京: くろしお出版.
- Levin, Beth & Rappaport Hovav, Malka (1996). *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Interface*. Linguistic Inquiry Monograph 26. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Lindner, Susan Jean (1981). *Lexico-semantic Analysis of English Verb-particle Constructions with Up and Out*. Ph. D. thesis, University of California, San Diego.
- Lødrup, Helge (2000). “Underspecification in Lexical Mapping Theory” In Butt, Miriam & King, Tracy Holloway (Eds.), *Argument Realization*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Lüdeling, Anke (2001). *Particle verbs and similar constructions in German*. Stanford: CSLI Publications.
- Massam, Diane (2001). “Pseudo noun incorporation in Niuean” *Natural Language and Linguistic Theory*, **19** (1), 153–197.
- Matsumoto, Yo (1996). *Complex predicates in Japanese: a syntactic and semantic study of the notion ‘Word’*. Stanford, Tokyo: CSLI Publications and Kurosio Publishers.
- 松本 曜 (1996). 「語とは何か」. 『言語』, **25** (11), 38–45.
- McIntyre, Andrew (2001). “Argument blockages induced by verb particles in English and German: event modification and secondary predication” In Dehé, Nicole & Wanne, Anja (Eds.), *Structural Aspects of Semantically Complex Verbs*, pp. 131–164. Frankfurt, Berlin, New York: Peter Lang.

- McIntyre, Andrew (2003). "Preverbs, argument linking and verb semantics" In Booi, Geert E. & van Marle, Jaap (Eds.), *Yearbook of Morphology 2003*, pp. 119–144. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Mithun, Marianne (1984). "The evolution of noun incorporation" *Language*, **60**, 847–895.
- Mithun, Marianne (1986). "On the nature of noun incorporation" *Language*, **62**, 32–38.
- Norén, Kerstin (1996). *Svenska partikelverbs semantik*. Nordistica Gothoburgensia 17. Göteborg: Acta Universitatis gothoburgensis.
- Norén, Kerstin (2000). "Partikelförbindelser och möjliga förblindelser" In Engdal, Elisabet & Norén, Kerstin (Eds.), *Att använda SAG*, pp. 383–393. Institutionen för svenska språket, Göteborgs universitet.
- Pinker, Steven (1989). *Learnability and Cognition : The acquisition of argument structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Platzack, Christer (1983). "Existential Sentences in English, Swedish, German and Icelandic" In Karlsson, Fred (Ed.), *Papers from the Seventh Scandinavian Conference of Linguistics*. Helsinki: University of Helsinki, Department of General Linguistics.
- Platzack, Christer (1998). *Svenskans inre grammatik : det minimalistiska programmet : en introduktion till modern generativ grammatik*. Lund: Studentlitteratur.
- Riemsdijk, Henk C. van (1978). *A Case Study in Syntactic Markedness : The Binding Nature of Prepositional Phrases*. Studies in Generative Grammar 4. Dordrecht: Foris Publications.
- Rivero, María-Luisa (1992). "Adverb incorporation and the syntax of adverbs in Modern Greek." *Linguistics and Philosophy*, **15**, 289–331.
- Roeper, Thomas & Siegel, Muffy E. A. (1978). "A lexical transformation for verbal compounds" *Linguistic Inquiry*, **9**, 199–260.
- Sells, Peter (2000). "Negation in Swedish: where it's not at." In Butt, Miriam & King, Tracy (Eds.), *Proceedings of LFG-00*. Stanford:, CSLI Publications.
- Sells, Peter (2001). *Structure, Alignment and Optimality in Swedish*. Stanford Monographs

- in Linguistics. Stanford: CSLI Publications.
- Simpson, Jane (1983). "Resultatives" In Levin, Lori S., Rappaport, Malka, & Zaenen, Annie (Eds.), *Papers in Lexical-Functional Grammar*, pp. 143–157. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Spencer, Andrew (1995). "Incorporation in Chukchi." *Language*, **71**, 439–489.
- Stiebels, Barbara (1996). *Lexikalische Argumente und Adjunkte: Zum semantischen Beitrag von verbalen Präfixen und Partikeln*. Studia grammatica 39. Berlin: Akademie Verlag.
- Stiebels, Barbara & Wunderlich, Dieter (1994). "Morphology feeds syntax: the case of particle verbs" *Linguistics*, **32**, 913–968.
- Strzelecka, Elżbieta (2003). *Svenska partikelverb med in, ut, upp, och ner: En semantisk studie ur kognitivt perspektiv*. Skrifter utgivna av institutionen för nordiska språk vid Uppsala universitet. Uppsala: Department of Scandinavian languages, Uppsala University.
- Svenonius, Peter (2003). "Swedish particles and directional prepositions" In Lars-Olof Delsing, Cecilia Falk Gunlög Josefsson & Sigurdsson, Halldór Ármann (Eds.), *Grammar in Focus: Festschrift for Christer Platzack*, pp. 343–351. Lund: Dept. of Scandinavian Languages, Lund University.
- Teleman, Ulf., Hellberg, Staffan., & Andersson, Erik. (Eds.) (1999a). *Svenska Akademiens grammatik 2: Ord*. Stockholm: Norstedts Ordbok.
- Teleman, Ulf., Hellberg, Staffan., & Andersson, Erik. (Eds.) (1999b). *Svenska Akademiens grammatik 3: Fraser*. Stockholm: Norstedts Ordbok.
- Thorell, Olof (1977). *Svensk grammatik* (2nd. edition). Stockholm: Esselte Studium.
- Tohno, Takayuki (2004). "Partikelverb- och resultativkonstruktion i svenskan: fallet **ihjäl** och **till döds**.".
- Toivonen, Ida (2002). "Swedish particles and syntactic projection" In Dehé, Nicole, Urban, Silke, McIntyre, Andrew, & Jackendoff, Ray (Eds.), *Verb-Particle Explorations, Interface Explorations 1*, pp. 191–209. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.

- Toivonen, Ida (2003). *Non-Projecting Words: A Case Study of Swedish Particles*. Studies in Natural Language and Linguistic Theory 58. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- van Geenhoven, Veerle (1998). *Semantic Incorporation and Indefinite Descriptions: Semantic and Syntactic Aspects of Noun Incorporation in West Greenlandic*. Stanford, CA.: CSLI Publications.
- Vikner, Sten (1995). *Verb Movement and Expletive Subjects in the Germanic languages*. Oxford studies in comparative syntax. New York, Oxford: Oxford.
- Washio, Ryuichi (1997). "Resultatives, compositionality and language variation." *Journal of East Asian Linguistics*, **6**, 1–49.
- Zeller, Jochen (2001a). "How syntax restricts the lexicon: particle verbs and internal arguments" *Linguistische Berichte*, **188**, 461–494.
- Zeller, Jochen (2001b). *Particle Verbs and Local Domains*. Linguistik aktuell/Linguistics Today 41. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.